

岡山県真庭郡美甘村

堂の前遺跡

1989年3月

岡山県文化財保護協会

例 言

1. 本書は、遺跡整備計画に伴い、美甘村教育委員会が実施した「堂の^{どう}前^{まえ}遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は岡山県真庭郡^{まにのへ}美甘村^{みかむら}大字美甘3883-1番地ほかに所在する。
3. 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員平井泰男が担当し、確認調査を昭和60年8月20日から23日、本格調査を昭和61年8月25日から9月30日まで実施した。現地での調査にあたっては、地元有志の方々の協力を得た。記して深甚の謝意を表します。
4. 本書の作成は平井が行った。作成にあたっては、おもに下記の方々から援助を受けた。記して深謝の意を表します。

政田孝氏（全ての遺物写真撮影）、埴岡美矢さん（一部の遺物実測）、安井ともえさん（一部の遺物実測）、岩谷みさえさん（一部の遺物実測）、田中淑子さん（全ての遺構トレース）

石製品の石材同定については岡山理科大学三宅寛教授の手を煩し有益な教示と助言を得た。
5. 挿図中の高度値はすべて海拔高であり、方位は、第1、3、4、5図が真北、第6、8、11、12、13、20、22、23図が磁北である。
6. 第5図は建設省国土地理院発行の50000分の1地形図「湯本」・「勝山」を縮小したものである。
7. 遺物実測図の中で、スクリーントーン（網）で示している土器は丹塗り部分を、また石製品は研磨、磨滅部分を示している。
8. 写真図版のうち遺物写真に付した番号は、各実測図の番号と一致する。
9. 出土した遺物、および実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1	第2章 遺跡の環境	5
第1節 調査に至る経緯と調査体制	1	第3章 調査結果	7
第2節 調査の方法と経過	3	第4章 まとめ	50

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1/2500)	1	(1/4)	21
第2図 遺跡発見時の採集遺物(1/4)	2	第23図 4号土壇平・断面図(1/30)、出土土器(1/4)	22
第3図 調査区位置図(1/1000)	3	第24図 1号か2号住居跡下層出土土器(1/4)	23
第4図 遺跡位置図(黒丸印)	5	第25図 1号か2号住居跡上層出土土器(1/4)	24
第5図 美甘村内主要遺跡分布図(1/100000)	6	第26図 遺構に伴わない土器(1/4)	25
第6図 遺構全体図(1/100)	7	第27図 遺構に伴わない土器(1/4)	26
第7図 調査区断面図(1/60)	8	第28図 遺構に伴わない土器(1/4)	27
第8図 1号、2号住居跡平面図(1/80)	9	第29図 遺構に伴わない土器(1/4)	28
第9図 1号住居跡平・断面図(1/80)	10	第30図 遺構に伴わない土器(1/4)	29
第10図 1号住居跡出土土器(1/4)	11	第31図 遺構に伴わない土器(1/4)	30
第11図 2号住居跡平・断面図(1/80)	13	第32図 遺構に伴わない土器(1/4)	31
第12図 1号土壇平・断面図(1/30)	14	第33図 遺構に伴わない土器(1/4)	32
第13図 2号土壇平・断面図(1/30)、出土土器(1/4)	14	第34図 遺構に伴わない土器(1/4)	33
第14図 2号住居跡下層出土土器(1/4)	15	第35図 出土紡錘車(1/3)	34
第15図 2号住居跡下層出土土器(1/4)	16	第36図 出土石製品(1)(1/1)(網目は研磨部分)	35
第16図 2号住居跡上層土器溜り出土土器(1/4)	16	第37図 出土石製品(2)(1/3)	36
第17図 2号住居跡上層土器溜り出土土器(1/4)	17	第38図 出土石製品(3)(1/3)	37
第18図 2号住居跡上層出土土器(1/4)	18	第39図 出土石製品(4)(1/3)	38
第19図 2号住居跡上層出土土器(1/4)	19	第40図 出土石製品(5)(1/2)	39
第20図 3号住居跡平・断面図(1/80)	20	第41図 出土石製品(6)(1/3)	40
第21図 3号住居跡出土土器(1/4)	21	第42図 出土鉄器(1/2)	41
第22図 3号土壇平・断面図(1/30)、出土土器			

表目次

第1表 出土紡錘車一覧表	34	第4表 出土石製品一覧表(3)	40
第2表 出土石製品一覧表(1)	38	第5表 出土鉄器一覧表	42
第3表 出土石製品一覧表(2)	39	第6表 出土土器観察表	42

図版目次

図版1-1 堂の前遺跡遠景(矢印が調査地)(南東から)	5	調査前の状況(北東から)	
2 1号住居跡全景(北から)		6 調査風景(北から)	
図版2-1 2号住居跡全景(北から)		図版4 出土土器	
2 3号住居跡全景(東から)		図版5-1 2号住居跡上層出土土器	
図版3-1 1号土壇(東から)		2 出土土器(縄文時代後期、晩期)	
2 2号土壇(北から)		図版6 出土石製品と土製品	
3 3号土壇(西から)		図版7 出土石製品(玉)と玉造り関連遺物	
4 1、2号住居跡の柱穴内礎石(南西から)		図版8-1 出土鉄器	
		2 復元住居(北東から)	

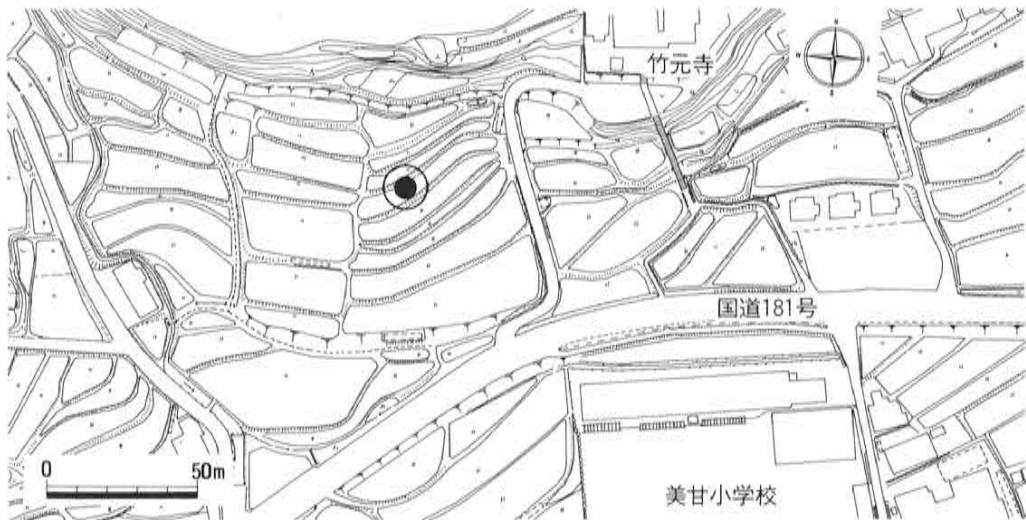
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と調査体制

遺跡は真庭郡美甘村大字美甘字堂の前3883-1ほかに所在する（第1図）。1985年7月、当該地において公営住宅建設のための宅地造成に伴う土砂の掘削を実施していたところ、弥生土器、土師器が発見されたという旨が県教委文化課に連絡された。そこで、急ぎ文化課職員が現地を視察し、文化財保護法第57条の6の規定に基づく「遺跡発見通知」の提出を指示した。「遺跡発見通知」は7月31日付けで美甘村長から提出され、これに基づき県教育委員会は遺跡確認調査を実施する必要があることを8月9日付けで通知した。この通知に基づき美甘村教委は8月13日付けで、岡山県古代吉備文化財センターに対して遺跡確認調査の実施を依頼した。

確認調査は1985年8月20日～23日に実施された。調査は、土器の出土地点を中心に幅1.5～2.0mのトレンチを設定し、遺構・遺物の確認と土層観察および実測、写真撮影等を行った（第3図）。その結果、第3図のD-EとD-F地区において複数の竪穴住居や柱穴および遺物包含層が、またA-B、B-C地区においては少数の溝、土壌および遺物包含層が確認された。特にD-E区において確認された推定径10mの円形竪穴住居の存在は注目された。

その後、美甘村はこの確認調査結果をふまえて当初計画を再検討した。その結果、当初計画である公営住宅建設を中止することにした。そのうえで当該地については現状で保存するが、確認調査において検出された推定径10mの弥生時代の竪穴住居については、美甘村内では貴重



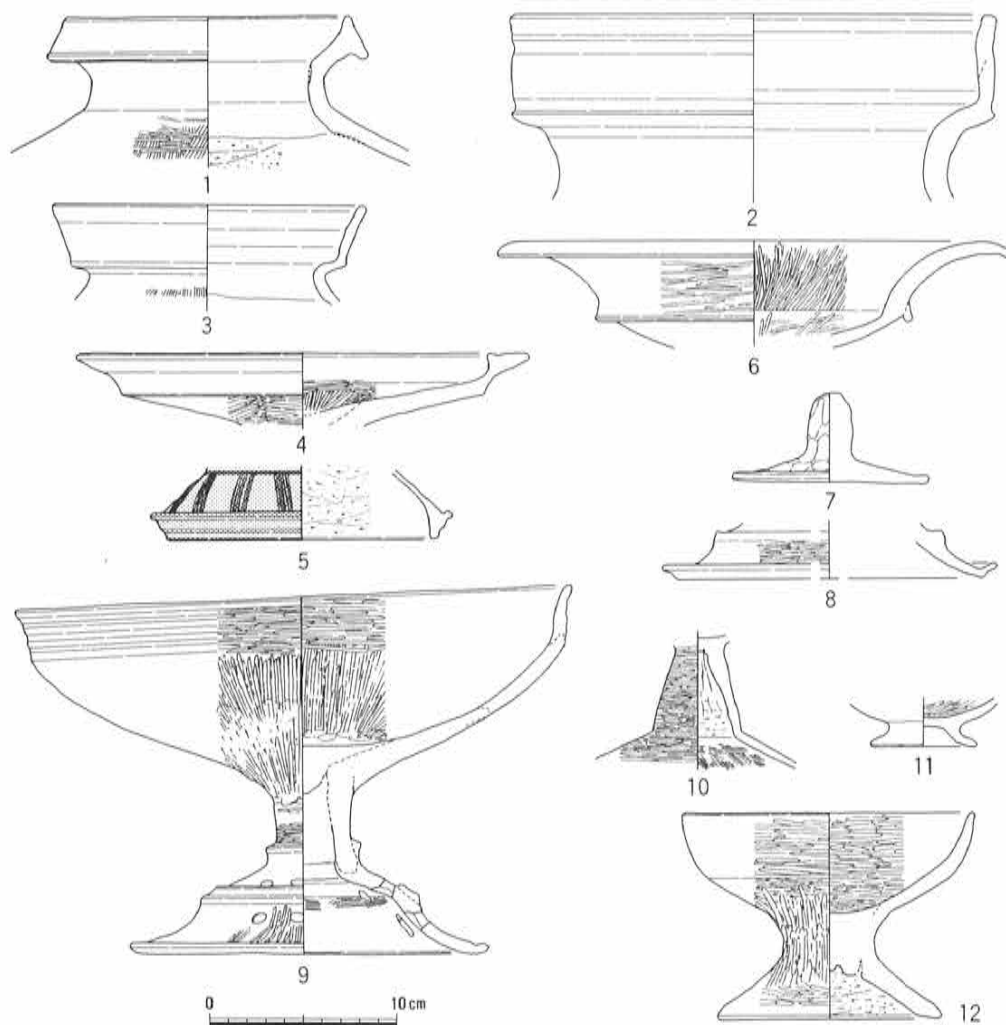
第1図 遺跡位置図 (1/2500)

第1章 調査の経緯と経過

な発見例であるため現地に復元住居を建て、将来的には史跡公園的なものとして整備したいという意向が示された。

こうした意向を受けて関係機関で協議を行った結果、確認調査で発見された竪穴住居の検出を目的とする発掘調査を実施し、復元住居建築のための基礎資料を作ることになった。この協議結果に基づき、美甘村教育委員会は1986年8月18日付けで文化財保護法第98条の2の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査通知」を提出した。

発掘調査は美甘村教育委員会が主体となり、岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主事平井泰男が発掘担当者として実施することになった。発掘調査期間は、8月25日から9月30日までである。



第2図 遺跡発見時の採集遺物 (1/4)

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は、確認調査においてその一部が発見された推定径約10mの弥生時代後期の竪穴住居の全掘を目的として、約120㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の検出および実測・写真撮影等を行った（第3図）。

調査は、調査区を4つのグリッドに分けて掘り下げることから始めた。調査地は、すでに宅地造成工事によって現水田層が除去されており、地表面を掘り下げるとすぐに多量の土器が出土し始めた。しかしながら、土層が黒ボク層であるため、遺構の検出は困難であった。地表下約30cm掘り下げたところ西北部において竪穴住居の貼り床が検出され、管玉等の遺物も出土した。しかしながら、この竪穴住居は黒ボク層を掘り込んで作られており平面プランの検出は難しく、断面観察によって何とか推定することができた。この竪穴住居（3号住居跡）は出土遺物から弥生時代後期末のもので、確認調査のトレンチでは発見することができなかったものである。さらに掘り下げを進めたが、土器の出土量が多いものの目的の住居跡の平面形は判明せず、黄色土面まで掘り下げて初めて明らかになってきた。しかも、この1号住居跡内を掘り進めたところ、新たに住居跡（2号住居跡）が見つかった。この住居跡は1号住居跡内に納まる

形で存在しており、土層観察から1号住居跡を切って作られたことが明らかとなった。

このように、各住居跡の検出が困難であったこと、および1号、2号住居跡については新しい2号住居跡が古い1号住居跡より後に検出されたことなどから、コンテナ約40箱に及ぶ多くの遺物のうち確実に各住居跡に伴って出土したものは少なかった。しかしながら、一部については東西、南北の断面図や出土場所、層位等の検討によってその



第3図 調査区位置図 (1/1000)

第1章 調査の経緯と経過

帰属をはっきりさせることができた。

また、調査区の南東部において縄文時代後～晩期のものと考えられる石鍬が住居跡の検出中に出土したが、この地点については今回の調査の目的である住居跡の発掘に支障がないため、出土層は完掘していない。縄文時代後～晩期の土器は住居跡埋土中から出土しており、調査区南部分に包含層が存在する可能性は強い。

尚、調査地については発掘終了後埋め戻しを行っている。

日誌抄

1985年

8月20～23日 トレンチによる確認調査

1986年

8月25～27日 調査開始。草刈り、前年度確認調査トレンチ掘り返し。包含層掘り下げ。土器の出土が多い。

28日 包含層掘り下げ。3号住居跡検出作業。貼り床は明瞭だが平面形の検出は非常に困難であった。

29日 3号住居跡床面まで掘り下げ。包含層掘り下げ。

9月1～3日 3号住居跡柱穴掘り下げ、実測、全景写真。包含層掘り下げ。

4～5日 包含層掘り下げ。1号住居跡検出作業。地山の黄色土まで掘り下げて初めて1号住居跡が検出できる。

8～9日 1号住居跡検出作業。南半部は黒ボク層を掘り込んで作られているため検出が困難であった。

10日 1号住居跡北半部埋土掘り下げ。床面まで掘り下げたところで新たに2号住居跡の存在が確認できた。

11日 1号住居跡埋土掘り下げ。2号住居跡検出作業。

12日 2号住居跡埋土掘り下げ。東西、南北壁断面実測。

18～19日 2号住居跡埋土掘り下げ、柱穴検出、掘り下げ。床面上で1号土壇を検出、掘り下げ。

22日 1号土壇掘り下げ、実測。1号、2号住居跡断面実測。現地説明会開催。

24～25日 1号、2号住居跡柱穴、中央穴検出、掘り下げ、断面実測。2号、3号土壇検出、掘り下げ。

26日 1号住居跡柱穴掘り下げ。全景写真。

29～30日 全体図作成。調査終了。



調査風景



現地説明会

第2章 遺跡の環境

堂の前遺跡の所在する真庭郡美甘村は岡山県の北西部に位置する。村の周囲は中国山地を形成する標高約600～1000mの山々が連なる。村の中央部には旭川の支流である新庄川が西から南へ流れ、その周辺に盆地平野が形成されている。この盆地は美甘・新庄盆地と呼ばれ、最も幅の広いところでも300mほどの小面積であるが、新庄川沿いに形成された宝蔵寺旦、宇南寺旦、中の旦、空の旦などと呼ばれる河岸段丘の存在は著名である。

遺跡はこの盆地のほぼ中央部に位置し、南に向ってのびる丘陵端部の緩斜面上に所在する。南方には新庄川および小規模な河岸段丘が広がり、日当りの非常に良い場所である。

美甘村内には20数か所の遺跡が確認されている（註1）。先土器時代の遺跡は知られていないが、森谷柳谷尻遺跡の採集遺物中に縄文時代早期の押型文土器が認められる（註2）。この遺跡は標高約500mの丘陵上に位置し、遺物は工事による整地面から発見されている。また、この遺跡に近接する森谷姫笹原遺跡からは同じような状況で縄文時代中期中頃の土器が採集されている。堂の前遺跡においても縄文時代後期、晩期の土器、石器が出土しているが、これら縄文時代の遺跡は県北部での遺跡の状況から考えて短期間の居住跡であると考えられる。

弥生時代から古墳時代の土器が発見されている遺跡は約10か所が知られている。これらの遺跡は新庄川右岸の河岸段丘や森谷川、鉄山川、黒田川などの小河川の周辺に所在しており、稲作に適した立地を求めた人々の生活跡と考えられる。堂の前遺跡では複数の竪穴住居の存在が明らかとなり、また弥生前期の土器も出土しており、弥生時代初めから村内の一部では稲作に基づく生活を営んでいたことが明らかになった。

古墳は7基が現存している。いずれも10m前後の横穴式石室をもつ円墳と考えられる。発掘調査の実施されたものは無く、詳細は不明であるが、須恵器や鉄刀の出土が知られている。

また、比丘尼ヶ旦遺跡と羽仁ヶ旦遺跡からは奈良～平安時代の骨蔵器が出土している（註3）。

中国山地は古くから製鉄の盛んな地域である。村の北部に位置する鉄山は、豊富な砂鉄と森林資源を背景とした美作地方における一大製鉄地であった。この鉄山をはじめ村内には多くのタタラ跡や鉄穴流跡が存在しており、このうち宇南寺旦では、近世タ



第4図 遺跡位置図(黒丸印)

第2章 遺跡の環境

タラの地下防湿施設（本床、小舟）の考古学的な発掘調査が実施されている（註4）。

（註1）『岡山県遺跡地図第四分冊』 岡山県教育委員会 1976年 『村誌美甘（上巻）』（後掲）

（註2）『村誌美甘（上巻）』 美甘村役場 1974年 P70の写真

（註3）間壁忠彦・間壁菫子「岡山県下の奈良・平安期の墳墓集成」『倉敷考古館研究集報第16号』
1981年 『村誌美甘（上巻）』（前掲）

（註4）近藤義郎「美作美甘村宇南寺且の床釣り設備」『たたら研究21号』 1977年



- | | | | |
|------------|------------|--------------|-----------|
| 1. 堂の前遺跡 | 7. 奥谷尻遺跡 | 13. 塚ヶ成古墳 | 19. 姫笹原遺跡 |
| 2. 羽仁ヶ且古墳 | 8. 宇南寺且遺跡 | 14. 菅谷古墳 | 20. 田中且遺跡 |
| 3. 羽仁ヶ且遺跡 | 9. 中の且遺跡 | 15. 宝蔵寺且遺跡 | 21. 桜ヶ且古墳 |
| 4. 奥塚古墳 | 10. 定国遺跡 | 16. 山の神塚古墳 | 22. 桜ヶ且遺跡 |
| 5. 投石場古墳 | 11. 空ヶ且遺跡 | 17. うしぐわびぎ遺跡 | |
| 6. 比丘尼ヶ且遺跡 | 12. スキー場遺跡 | 18. 山田遺跡 | |

第5図 美甘村内主要遺跡分布図（1/100000）

第3章 調査結果

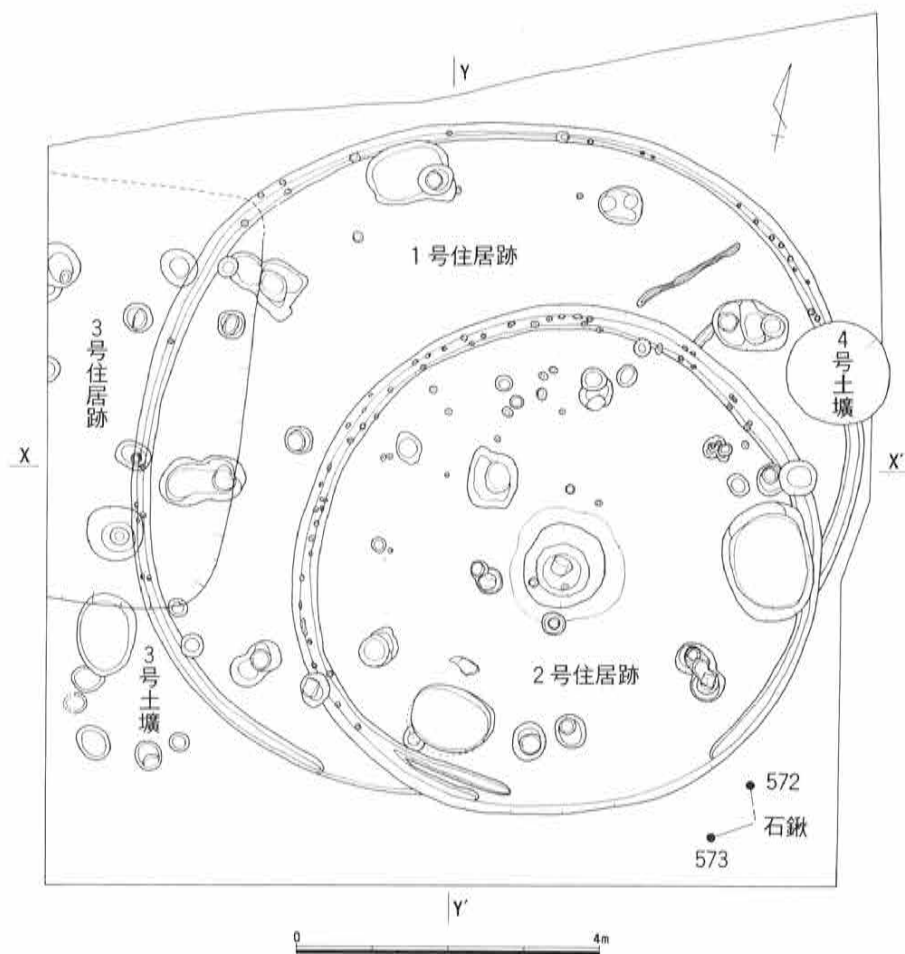
検出された遺構は堅穴住居跡3、土壇4および数個の柱穴である（第6図）。

（1）1号住居跡（第6～10図）

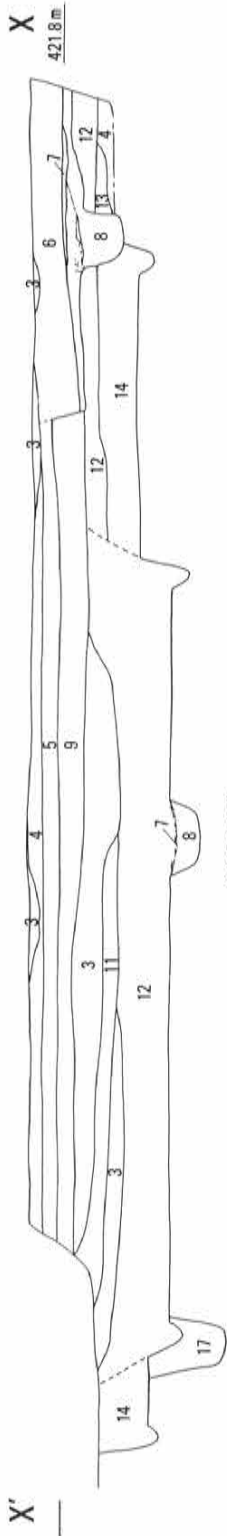
1985年度の確認調査においてその北端部が検出された堅穴住居で、復元住居建築のための基礎資料を得るため、1986年度の調査目的となった住居跡である。

住居の約 $\frac{1}{2}$ が2号住居跡によって壊されているため詳細な全体像については明らかでない。

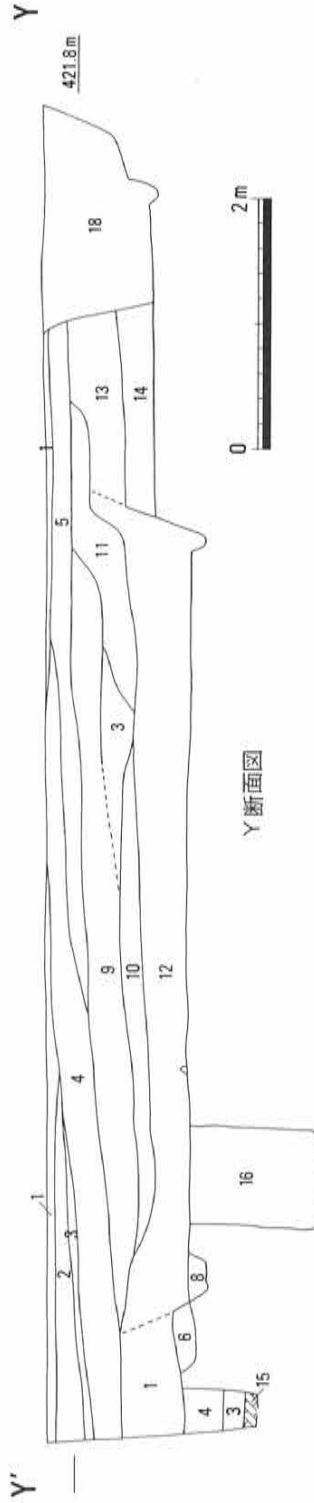
平面形は径920～980cmのややいびつな円形である。床面までの深さは検出面からでは最大で約30cmを測るが、第6、7図のX、Y断面の観察からは最大で約50cmが残存していたものと考えられる。壁に沿って幅20～30cm、深さ10cm前後の壁体溝がめぐっている。この壁体溝中には



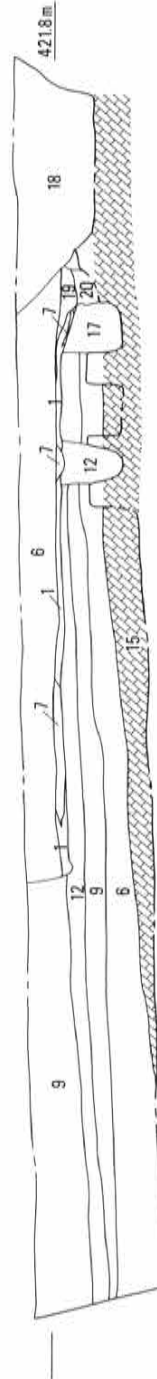
第6図 遺構全体図 (1/100)



X断面図



Y断面図



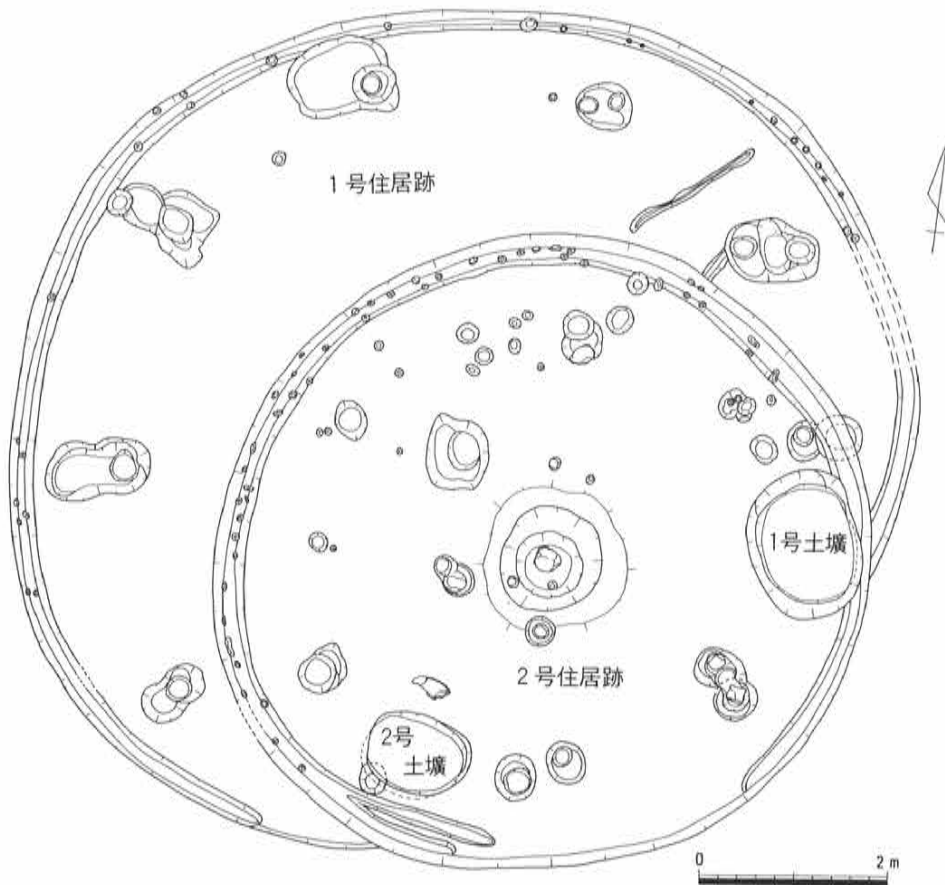
西壁断面図

- | | | | |
|-----------|------------------|--------------------|---------------------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 6. 暗灰褐色砂質土 | 10. 暗灰褐色砂質土(土器が多い) | 15. 黄色砂質土 |
| 2. 淡褐色砂質土 | 7. 貼り床 | 11. 灰褐色砂質土(土器が多い) | 16. 2号土壌 |
| 3. 褐色砂質土 | 8. 黒褐色砂質土(中央穴) | 12. 灰黒色砂質土 | 17. 灰黒色砂質土(黄色砂質土含む) |
| 4. 暗褐色砂質土 | 9. 黄色砂質土(プロック含む) | 13. 黒褐色砂質土 | 18. トレンチ埋土 |
| 5. 灰褐色砂質土 | | 14. (褐)灰黒色砂質土 | 19. 灰褐色砂質土(黄色砂質土含む) |
| | | | 20. 淡灰褐色砂質土 |

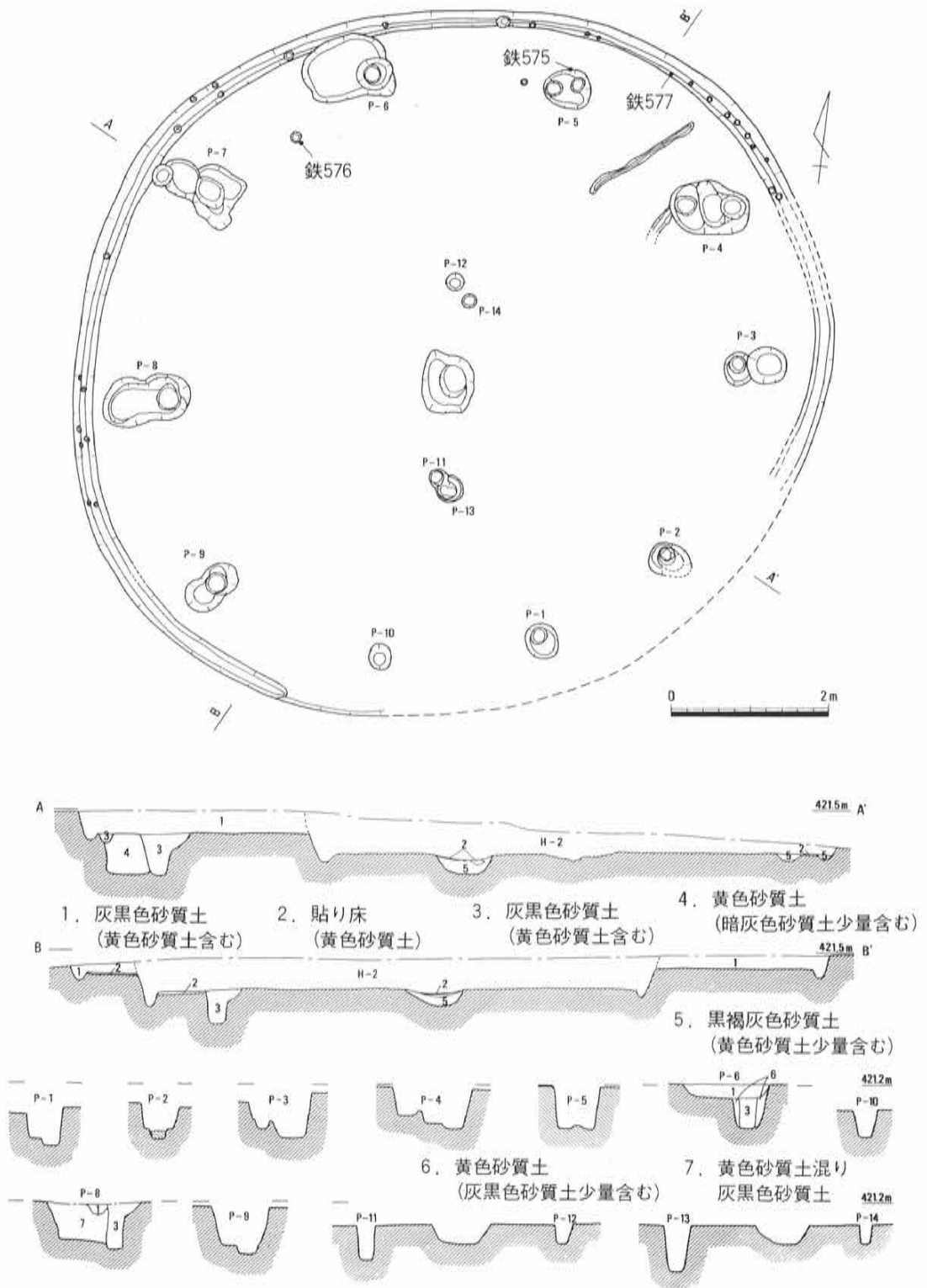
第7図 調査区断面図 (1/60)

径5～10cm、深さ10cm前後の小穴（杭の跡か）が部分的に認められる。床面は、北半部では黄色土の地山をベースとしているが、南端部では黒ボク層がベースとなるため貼り床が形成されている。また床面は水平ではなく、南に向かって約10cm徐々に低くなっている。

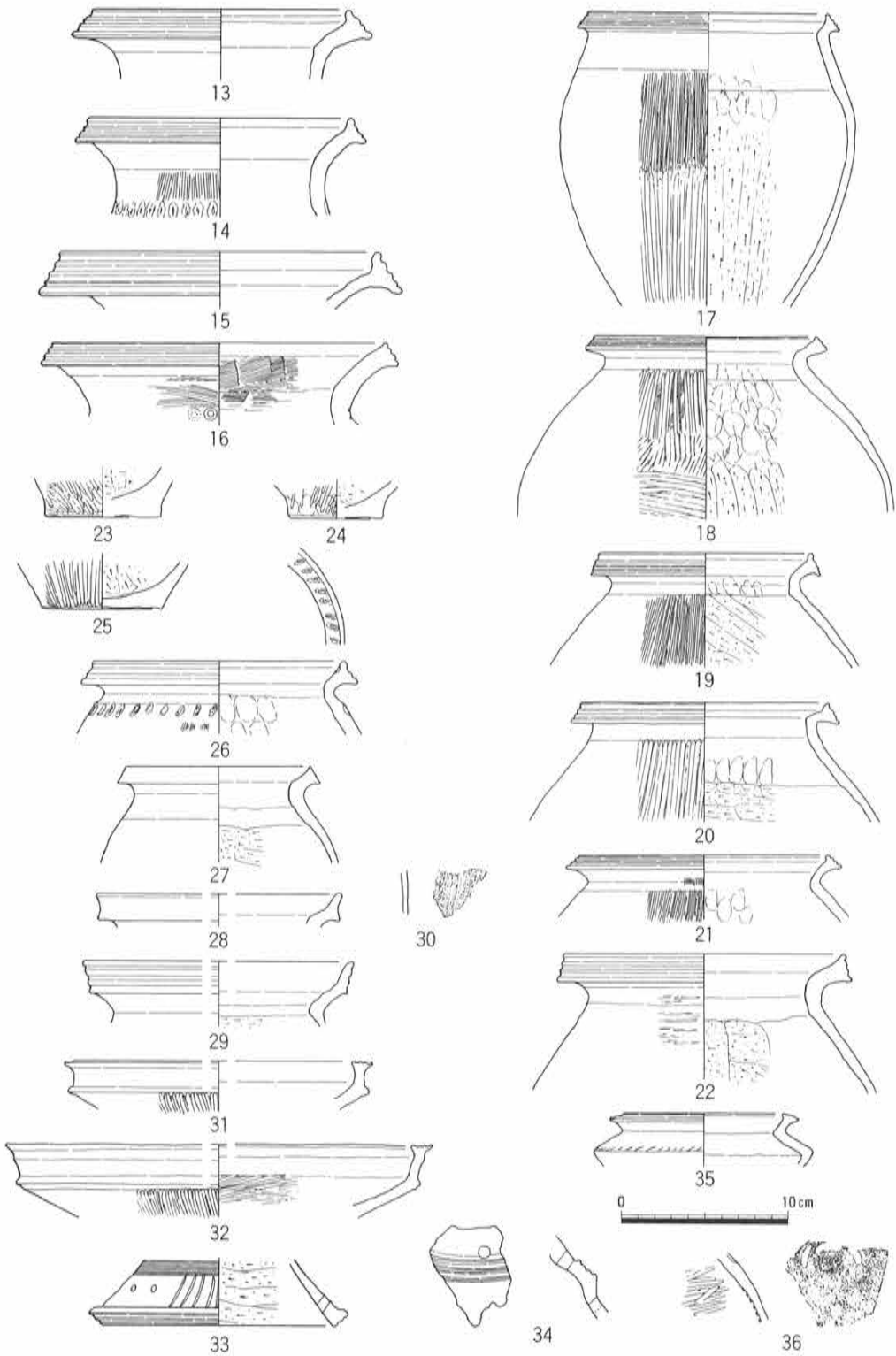
この住居跡の柱穴については、壁に沿ってほぼ等間隔に配置された10本の柱穴（P-1～10）と中央穴をはさんで存在する2本の柱穴（P-11～14）とで構成されていると考えたい。中央穴を中心として対称的に配置されている10本の柱穴は、ほぼ円形の掘方をもち、床面から50～70cmの深さまで掘られている。このうちP-3～5、7～9では2本の柱穴の存在が明らかとなった。そしてP-7、8では内側の柱穴が外側の柱穴より新しいことが切り合い関係から確認できた。P-11～14については、P-12、14がP-11、13に比べて約20～30cm浅く、またP-1～10に比べても浅いなどの疑問点もあるが、中央穴を中心として対称的に存在していることからこの住居跡の柱穴と考えたい。これらはP-11と12、P-13と14が一對となるものと考えられ、P-3～5、7～8における2つの柱穴の存在とあわせて、柱の建て替えが行わ



第8図 1号、2号住居跡平面図 (1/80)



第9図 1号住居跡平・断面図 (1/80)



第10図 1号住居跡出土土器 (1/4)

第3章 調査結果

れたものと考えられる。なお、P-2では底面に礎石が据えられていた(図版3-4)。

中央穴は2号住居跡によって削平されており、本来の形状は留めていない。検出面での平面形は隅丸方形で、深さは床面から推定約50cmを測る。本来の埋土は不明である。断面形は深鉢状になると考えられる。内部には炭・灰および加熱赤変部分は認められなかった。

出土遺物には、土器、土製品、石製品、鉄器などがあり、おもに埋土中から廃棄された状況で出土した。

土器は、壺、甕、高杯などの小片がコンテナ約2箱分出土した(第10図13~36)。

土製品は、紡錘車および紡錘車の未製品が8点出土した(第35図510~517)。

石製品は、石包丁(538)、すり石(548、551、553)、叩石(552)などが出土した。

鉄器は、鉈など3点が床面に密着した状況で出土した(第42図575~577)。

これらの遺物からこの住居跡の廃絶時期は弥生時代後期初頭と考えられる(第4章参照)。

(2) 2号住居跡(第6~8、11~19図)

1号住居跡の南部分を壊す形で作られている竪穴住居である。

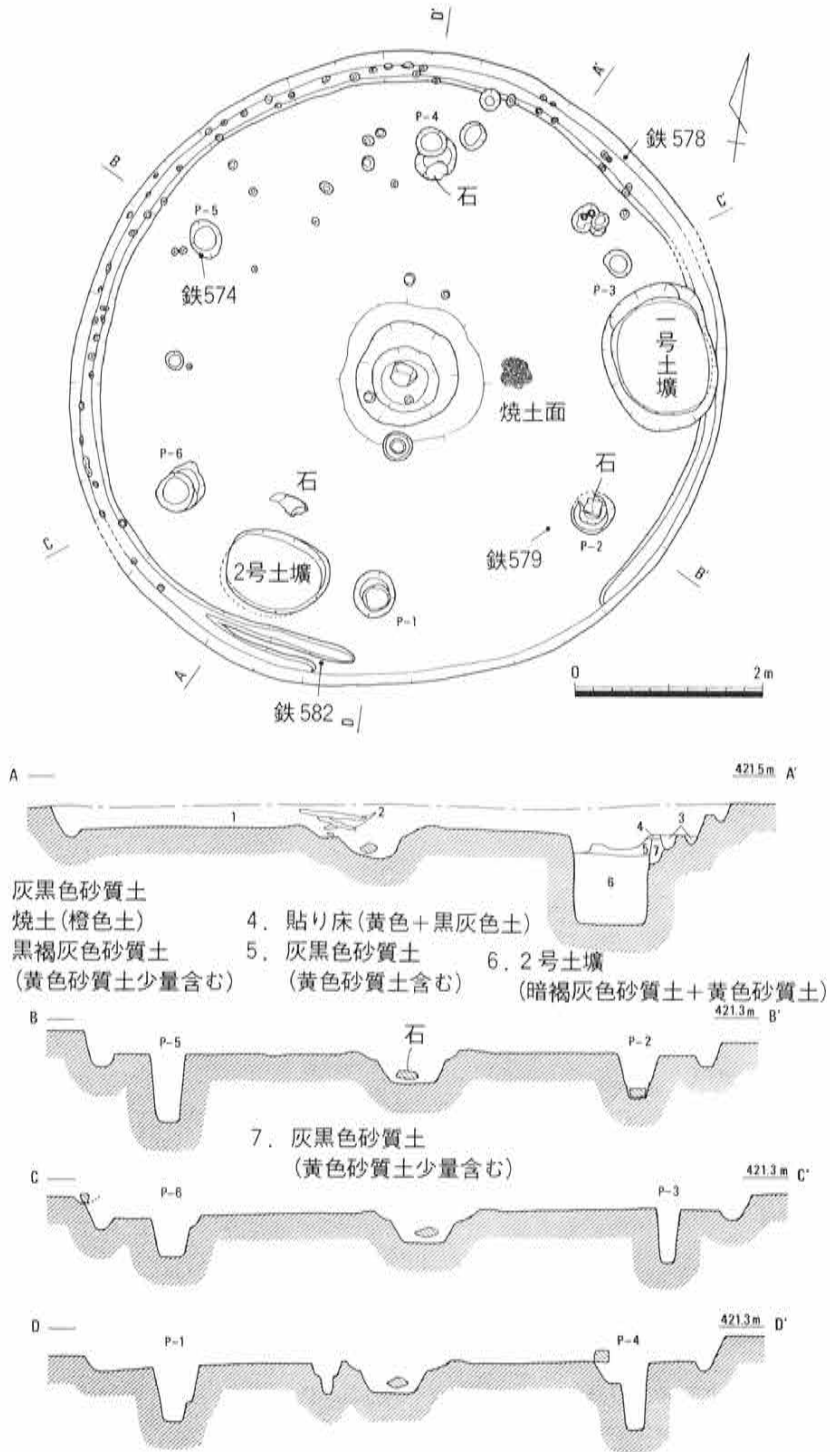
平面形は直径約680~700cmのほぼ正円形である。壁に沿って幅30cm前後、深さ10cm前後の壁体溝が掘られているが、南東部分では黒ボク層のため検出することができなかった。本来は一周していたものと考えられる。また、壁体溝中に小穴(径5~10cm、深さ10cm前後)を多数検出した。住居跡の壁を保護するための杭の跡とも考えられるが、配置が規則的でなく、また南東部には存在しないことなど性格は不明である。床面までの深さは検出面からでは約25cmを測るが、第6、7図のX、Y断面の観察から約80cmの深さが残存していたと考えられる。床面はほぼ水平で殆どが黄色土の地山をベースとしているが、南端部分では黒ボク層がベースとなっており、貼り床をつくっている。

柱穴は6本(P-1~6)検出した。中央穴を中心として対称的な位置にあり、壁に沿ってほぼ等間隔に設けられている。平面形は径30~50cmの円形で、深さは床面から40~70cmを測る。P-2では底面に礎石が据えられていた(図版3-4)。

中央穴は、100~120cmの不整形円で、深さは床面から約35cmを測る。深さ約10cmでわずかな段をもち、底面はほぼ平らである。底面近くには石が据えられていた。中央穴の縁辺には、幅20~30cmで高さ2~3cmの高まりがある。内部には炭・灰や加熱赤変部分は認められなかった。また、中央穴の東の床面には30×35cmの範囲に加熱赤変部分(焼土面)が認められた。

この住居跡からは、貯蔵穴と考えられる床面から掘り込まれた2基の土壇が検出された。

1号土壇は東端部に位置し、一部壁体溝を切っている。平面形は約120×160cmの楕円形で深さは約115cmを測る。底面は平らである(第12図)。埋土は4層あり、埋土中からは土器の小片がわずかに出土したのみである。



第11図 2号住居跡平・断面図 (1/80)

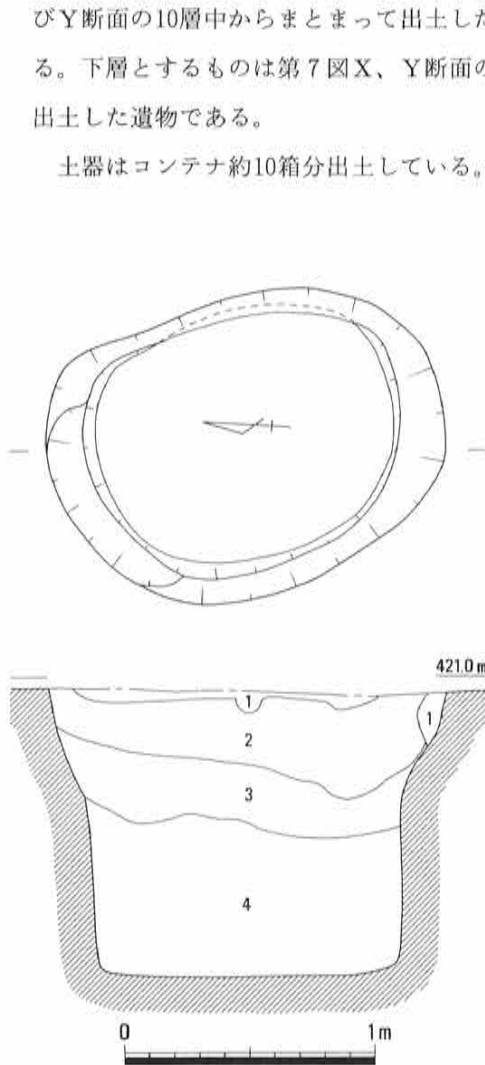
第3章 調査結果

2号土坑は南東部の壁際に検出された。平面形は約85×110cmの不整形な楕円形で、深さは約100cmを測る。断面形は箱形で、南部分は袋状になっている。埋土中からは土器片が少量出土した(第13図)。

住居跡の埋土から出土した遺物には、土器、土製品、石製品、鉄器などがある。

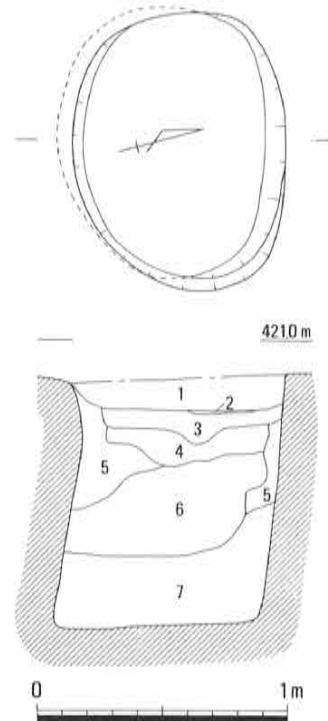
これらの遺物は大きく3つに区分することができる。上層とするものは第7図X、Y断面の3、10、11層出土の遺物である。また、上層土器溜りとするものは、第7図X断面の11層およびY断面の10層中からまとめて出土した遺物である。下層とするものは第7図X、Y断面の12層から出土した遺物である。

土器はコンテナ約10箱分出土している。壺、甕、

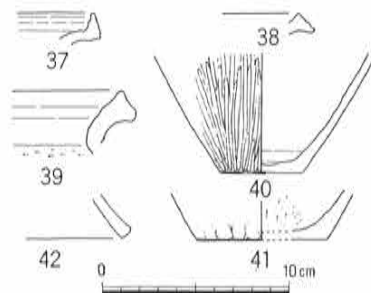


1. 灰黒色砂質土
2. 黄色砂質土
3. 暗灰色砂質土(黄色砂質土混り)
4. 黄色砂質土+灰黄色砂質土+暗灰色砂質土

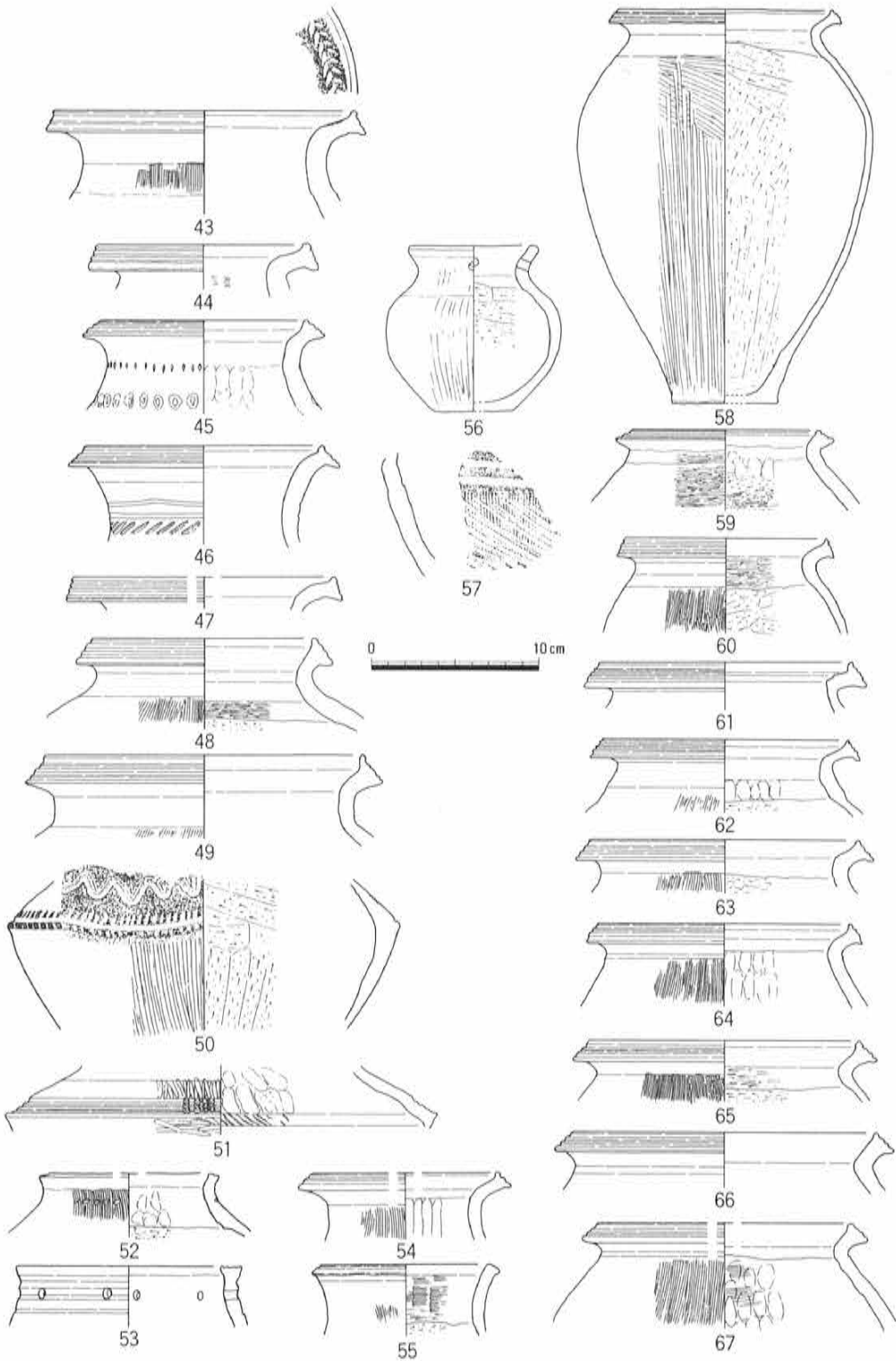
第12図 1号土坑平・断面図(1/30)



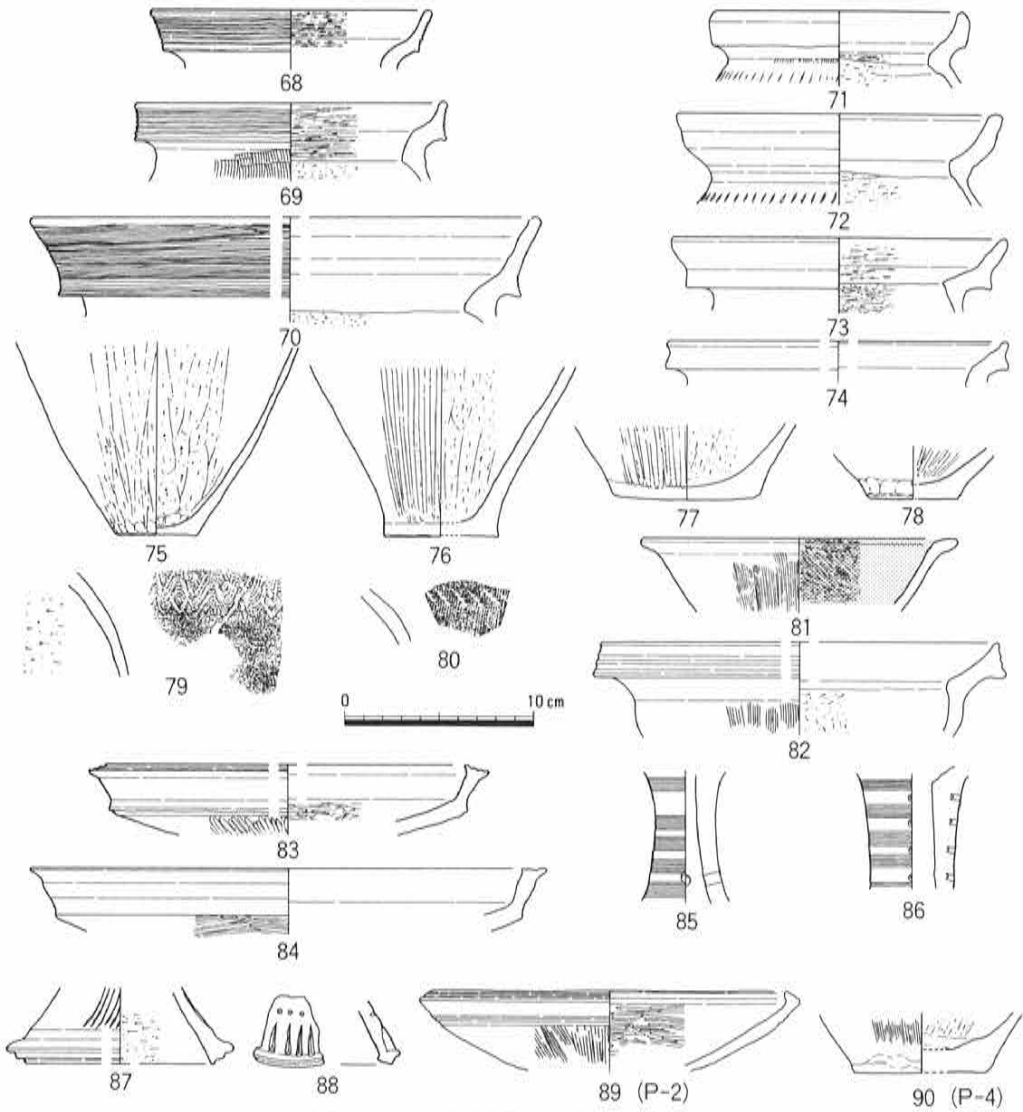
1. 灰黒色砂質土
2. 黄色砂質土(貼り床状)
3. 黒灰褐色砂質土
(黄色砂質土少量含む)
4. 黄色砂質土と暗灰色砂質土
(暗灰色砂質土混り)
5. 黄褐色灰色砂質土
6. 暗褐色灰色砂質土
(黄色砂質土混り)
7. 黄色砂質土



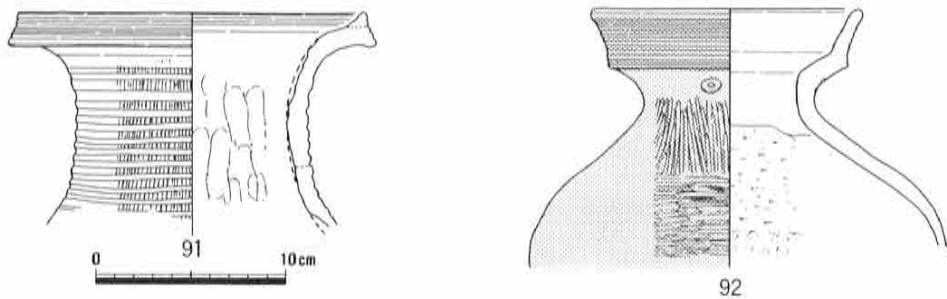
第13図 2号土坑平・断面図(1/30)
出土土器(1/4)



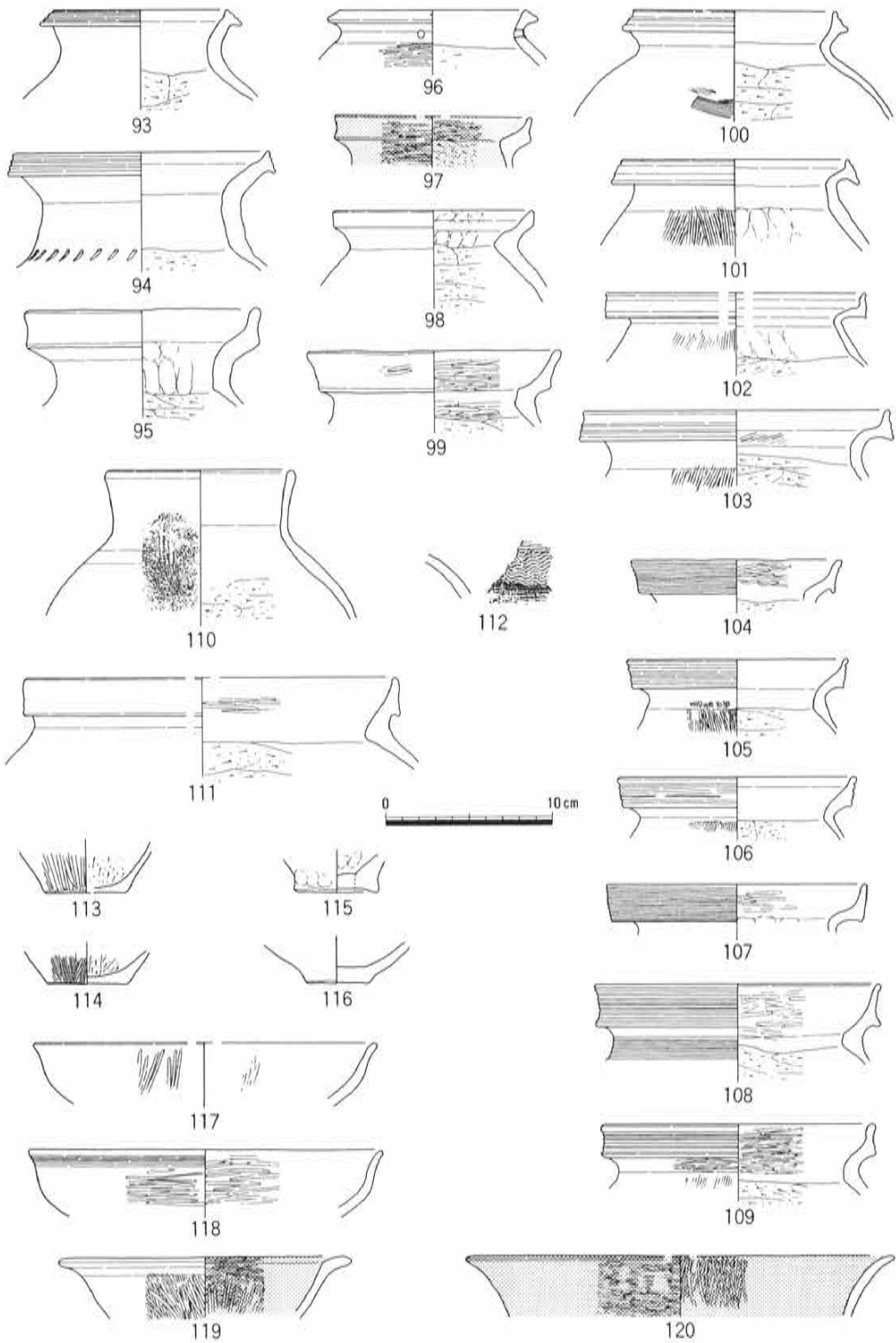
第14図 2号住居跡下層出土土器 (1/4)



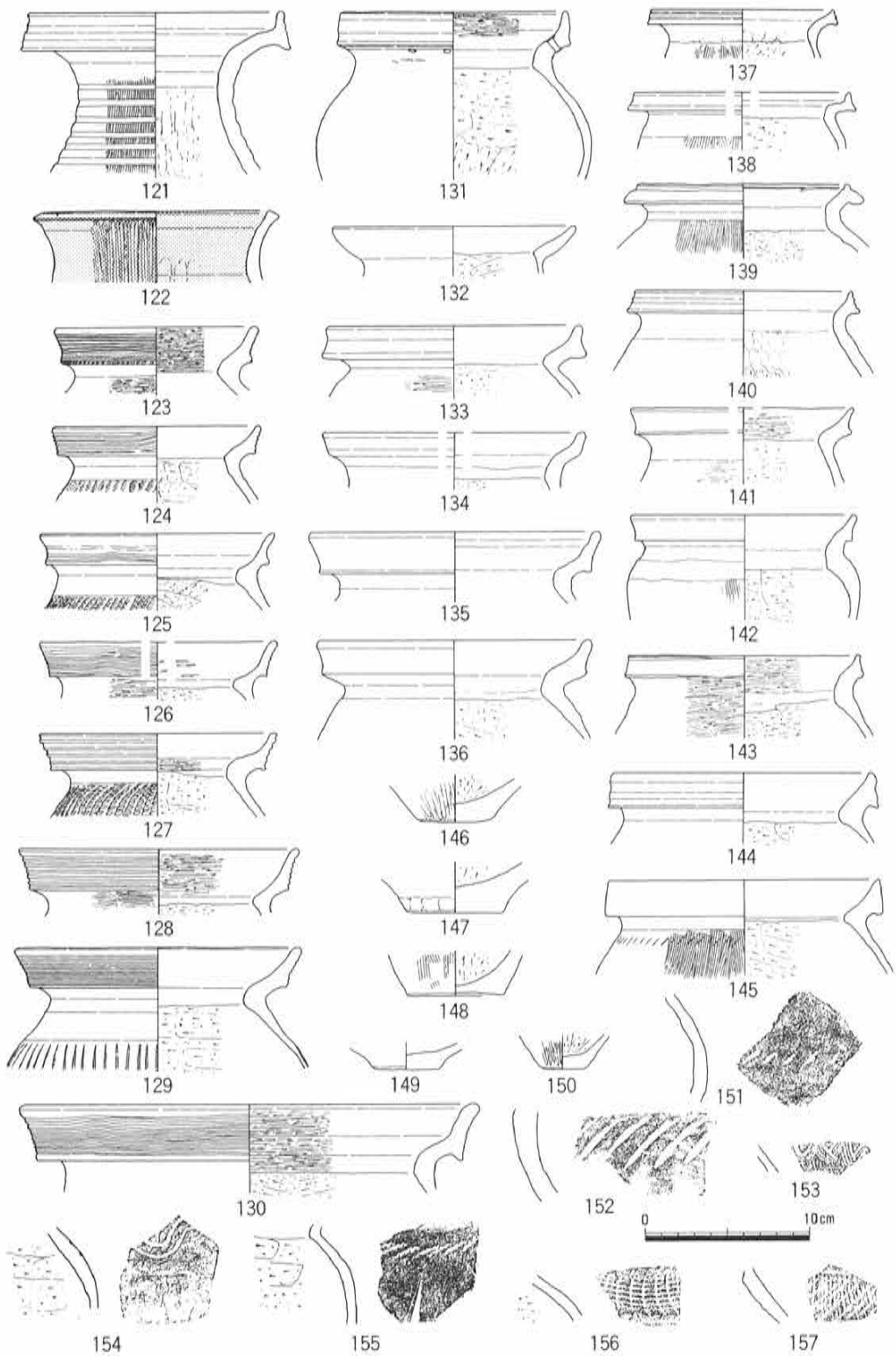
第15図 2号住居跡下層出土土器 (1/4)



第16図 2号住居跡上層土器溜り出土土器 (1/4)



第17図 2号住居跡上層土器溜り出土土器 (1/4)



第18図 2号住居跡上層出土土器 (1/4)

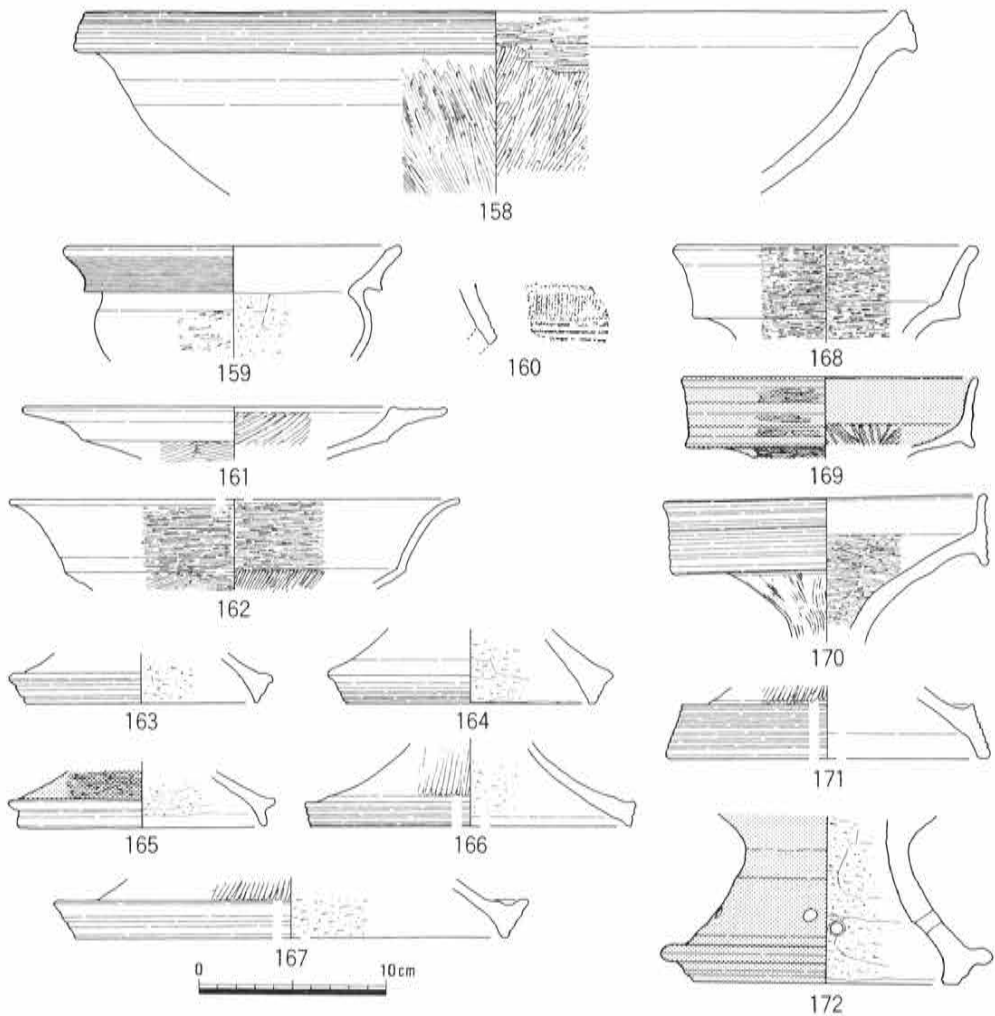
高杯が主で、量的には上層からの出土が多い。下層と上層とでは時期差が認められ、上層にやや新しい土器が含まれている（第14～19図）。

土製品は、上層から紡錘車が2点出土している（第35図518、519）。

石製品は、上層からは管玉（527）、勾玉の未製品（534）、石包丁（537）、砥石（556）、叩石（557）、562が出土した。また、下層からは管玉（525）、石鏃（560）が出土した。さらに、P-4の東の柱穴内から管玉（526）が出土している。

鉄器は斧、鉈などが6点出土している。上層からは583が、下層からは578、581が、そして床面から574、579、582が出土している。578の斧は鋳造品か鍛造品かは不詳である。

この住居跡の時期については、埋土下層が弥生時代後期初頭～前葉で、埋土上層および上層土器溜りが弥生時代後期中葉と考えられる（第4章参照）。



第19図 2号住居跡上層出土土器（1/4）

(3) 3号住居跡 (第6、20、21図)

調査区西北部で検出された竪穴住居で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が調査区内に残存していた。黒ボク層を掘り込んでつくられており、貼り床を検出してその存在が判明した。

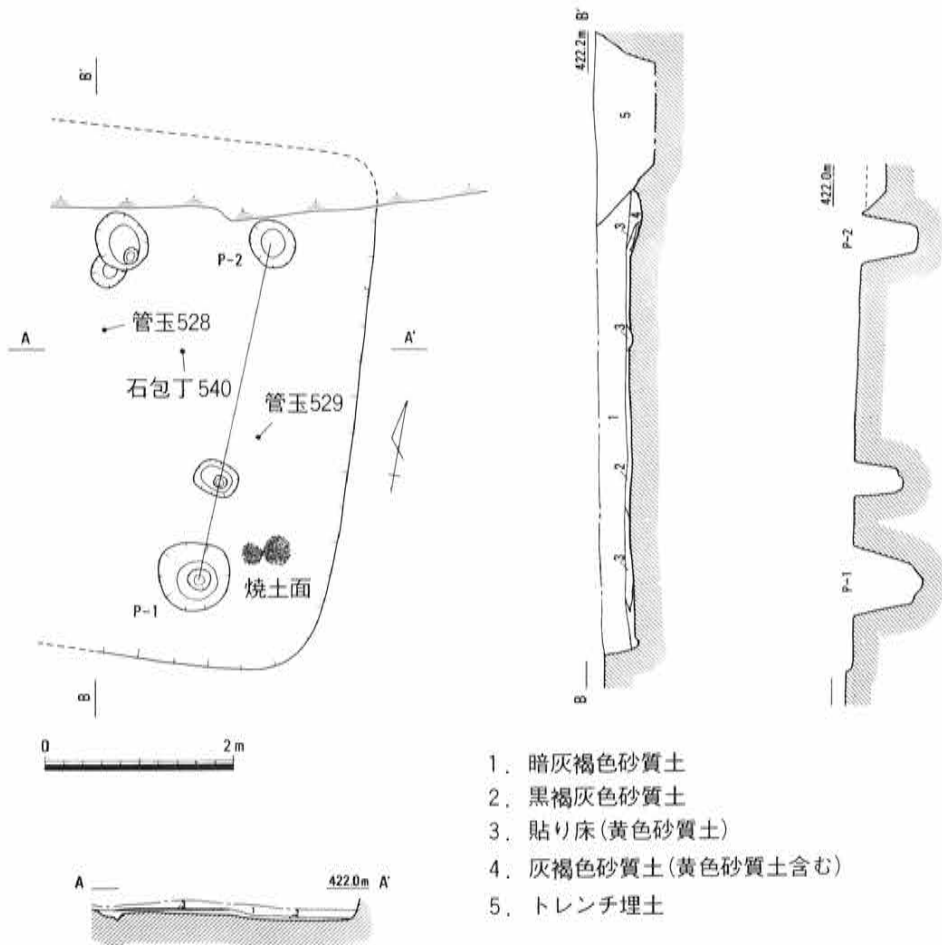
平面形の検出は非常に困難であったが、一辺約560cmの方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは約15cmであるが、調査区西壁の観察から約30cmの深さが残存していたと考えられる。床面の多くは貼り床となっており、固く叩き締められていた。また、P-1の東には火を受けて赤色に変色した部分が認められた。

柱穴は2本が検出された。円形を呈し床面からの深さは55~70cmを測る。

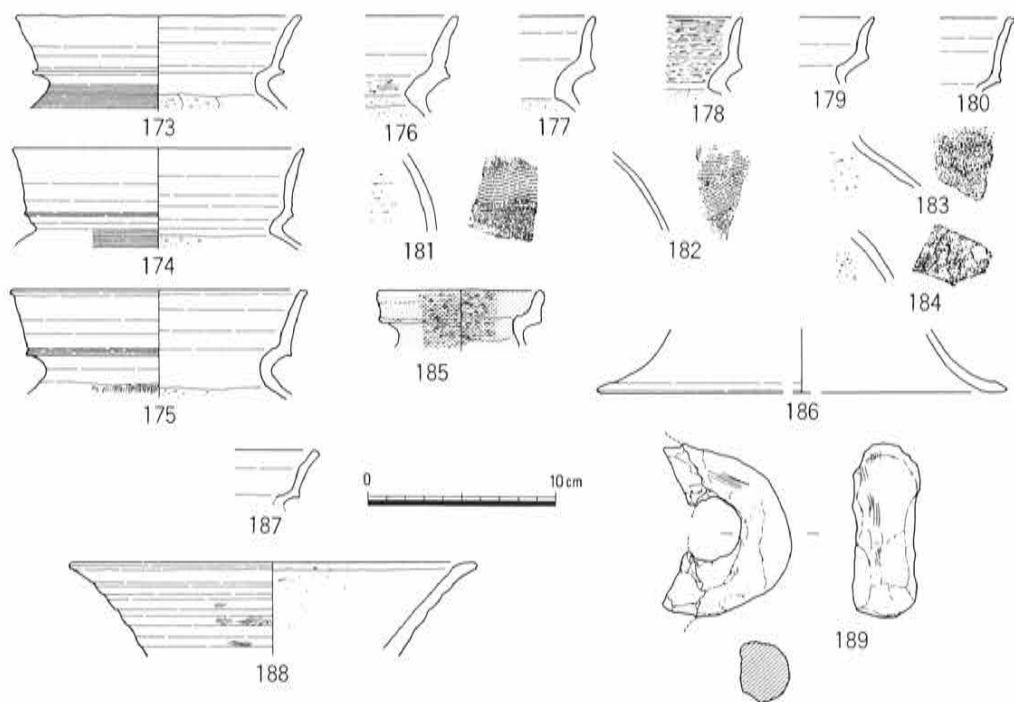
出土遺物には、土器、石製品、桃の種子などがある。

土器は、埋土中から甕、鼓形器台などの小片が少量出土している。

石製品は床面から管玉 (528、529) が、また埋土中から滑石の未製品 (533)、石包丁 (540)、



第20図 3号住居跡平・断面図 (1/80)



第21図 3号住居跡出土土器 (1/4)

石鏃(561)が出土している。

時期は、土器から弥生時代後期末と考えておきたい。

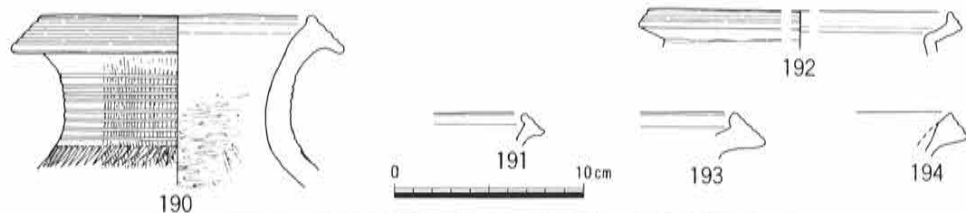
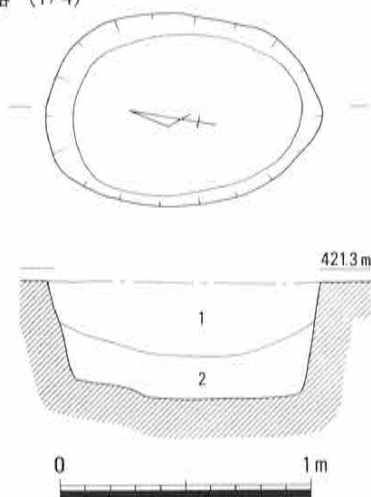
(4) 3号土坑(第6、22図)

調査区南西部において検出された土坑である。平面形は約110×80cmの楕円形を呈し、深さは検出面から約45cmを測る。

埋土中から少量の土器片(190~194)およびサヌカイト片、桃の種子が出土している。時期は弥生時代後期初頭~前葉と考えられる。

(5) 4号土坑(第6、23図)

調査区の東北部で検出された土坑である。1号住居跡 1. 灰黒色砂質土 2. 黒灰褐色砂質土 (黄色砂質土含む)



第22図 3号土坑平・断面図 (1/30), 出土土器 (1/4)

第3章 調査結果

を一部壊してつくられている。平面形は上面が径約115cmの円形で、底面が径約140cmの円形を呈する袋状土壇である。埋土は灰黒色砂質土で、拳大の石が多く認められた。

遺物は少量の土器（195～207）および叩石（554、555）が出土した。201の土器は県南部からの搬入品であろう。

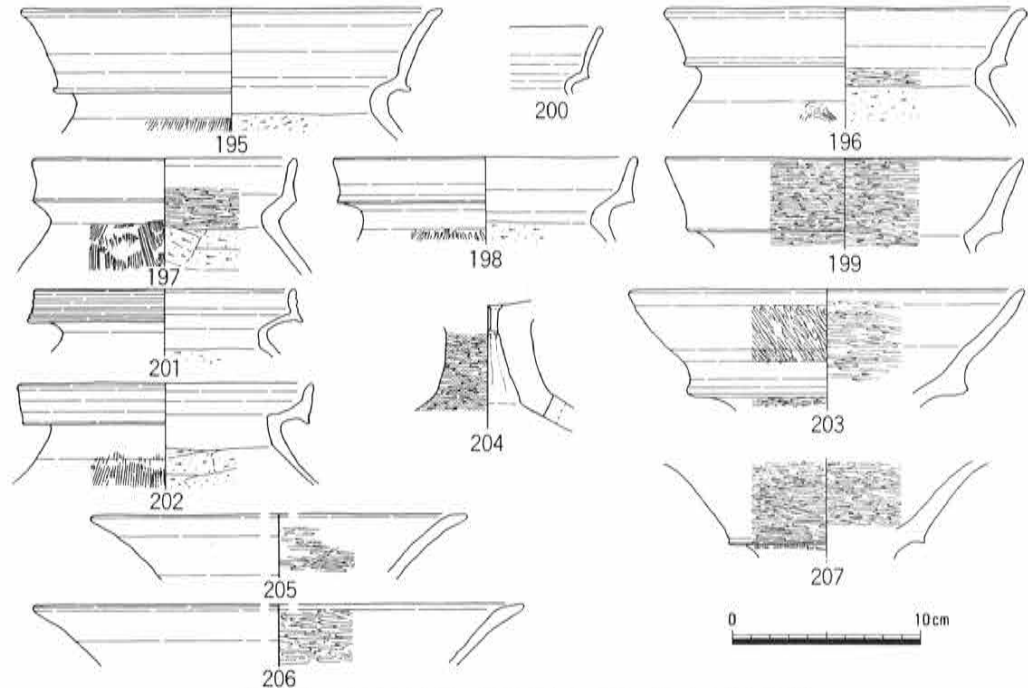
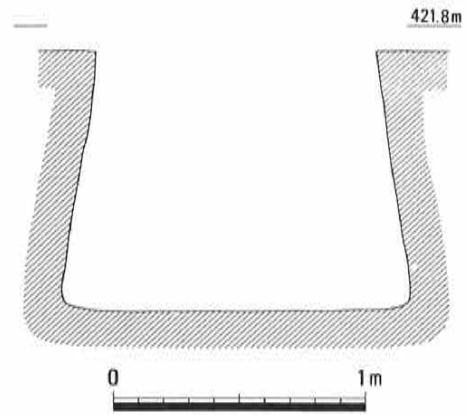
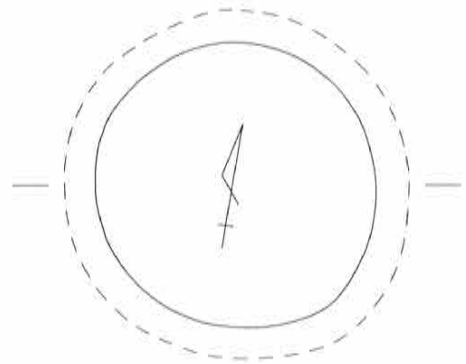
時期は弥生時代後期末で、貯蔵穴と考えられる。

(6) 柱穴その他 (第6、24～42図)

前述した遺構以外には柱穴が数個検出されたが、出土遺物はなく時期は不明である。

今回の調査では遺構の検出が困難であったため、出土遺構を特定できなかった遺物、および遺構に伴わない形で出土した遺物が多くある。

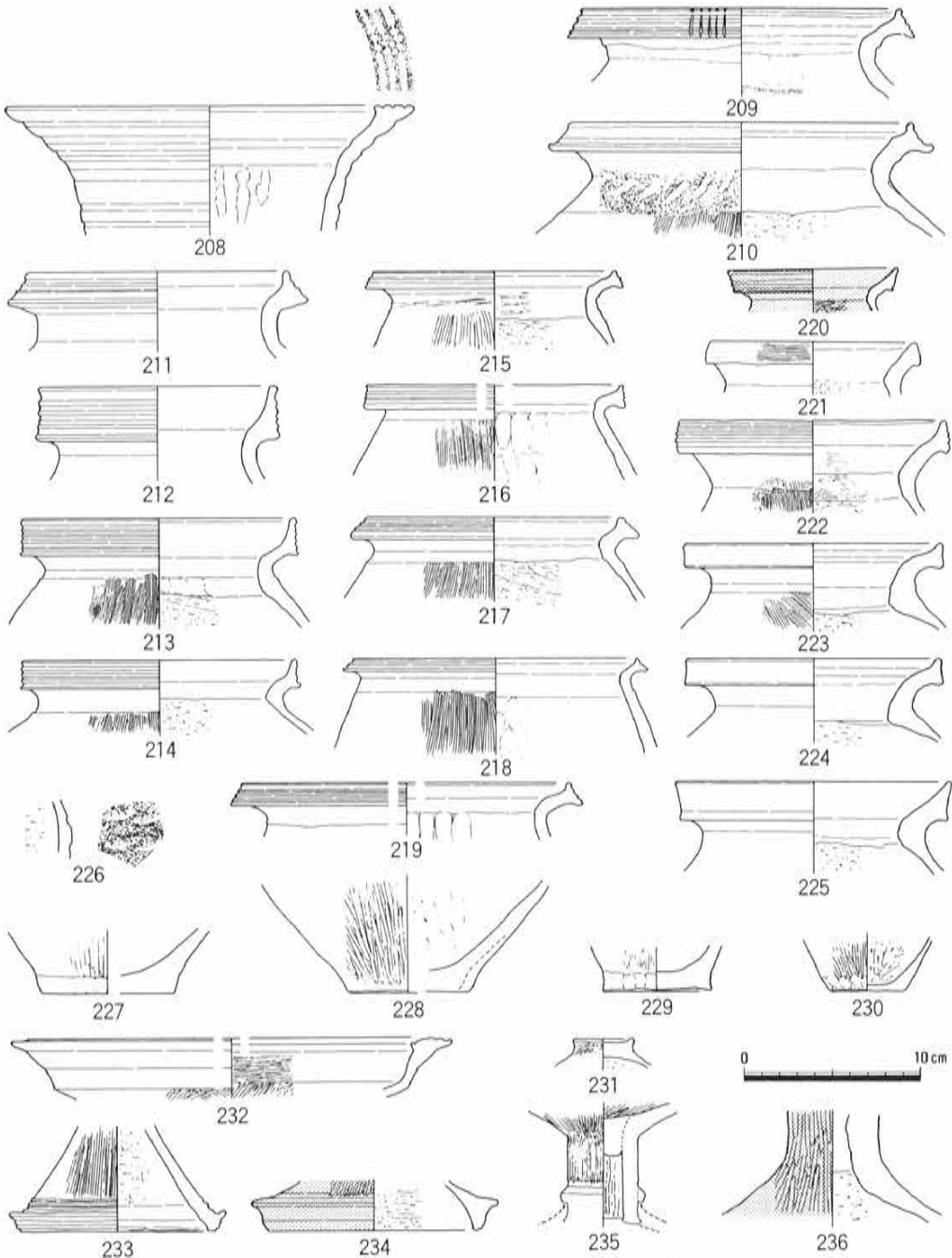
図示した遺物のうち、208～236は、1号住居跡か2号住居跡埋土下層か、また237～250は1



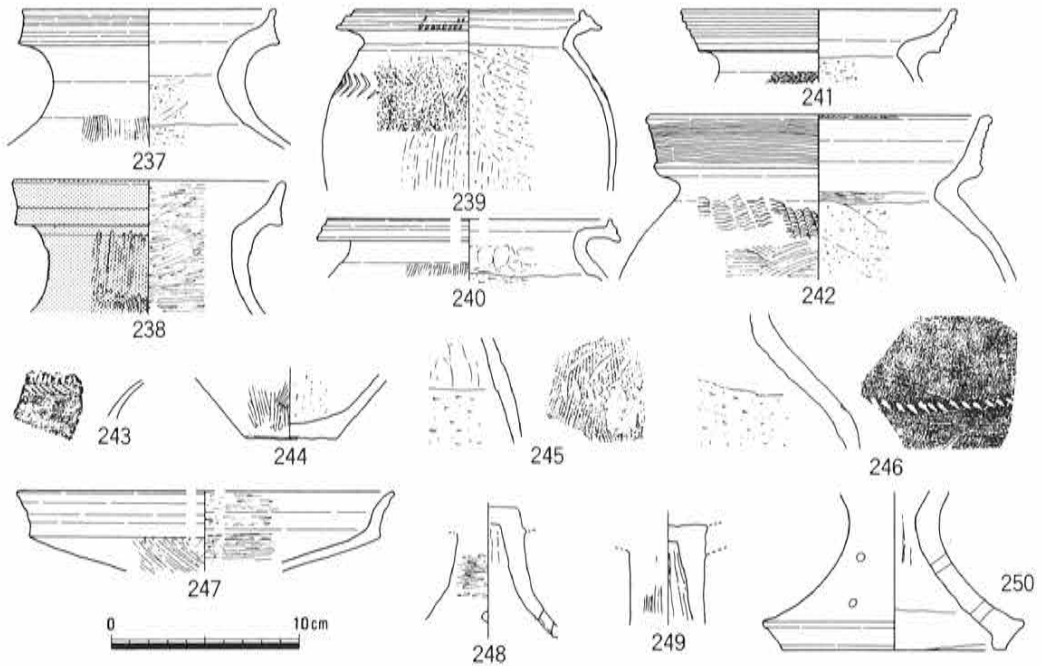
第23図 4号土壇平・断面図 (1/30), 出土土器 (1/4)

号住居跡か2号住居跡の埋土上層か特定できなかった土器である。

251～280は縄文土器で、1号、2号住居跡の埋土中および調査区南端の黒ボク層から出土した。これらのうち251は口縁外面に縄文を施しており後期（彦崎KⅡ式）、252～268、275、276は凸帯文土器で晩期のものであろう。259、260は2条凸帯をもつ深鉢の胴部凸帯部の破片



第24図 1号か2号住居跡下層出土土器 (1/4)



第25図 1号か2号住居跡上層出土土器 (1/4)

である。

281～284は弥生時代前期の土器で、1号、2号住居跡の埋土中から出土した。出土量はごく少量である。

285～307は弥生時代中期の土器で、1号、2号住居跡の埋土中から出土しており、ほぼ中期前～中葉のものと考えられる。

308～509は弥生時代後期以降の土器である。341～412、425～438、441～451の甕は、口縁部の形状、肩部における貝殻刺突文など岡山県北山間部の特徴をもつ土器である。424は形態および胎土の特徴から岡山県南部の弥生時代後期末の甕で搬入品の可能性が高い。また、439、440も岡山県南部の古墳時代初頭の口縁部に櫛描沈線文を施す甕で、搬入品であろう。506～509は工事による掘削面直下に出土した遺物で、506は奈良時代の須恵器杯身、507、508は須恵器甕である。509は、口禿の白磁皿で鎌倉時代前半のものである。

土製品、石製品、鉄器のなかでは、玉や玉の未製品および玉造りの工程で生じたと考えられる剥片の出土が注目される。530は蛇紋岩製の勾玉で表面には丁寧な研磨が施されている。531、532は勾玉の未製品と考えられ、表面はよく研磨されている。石材は蛇紋岩で、第7図X、Y断面の5層中から出土した。この土層の時期については伴出遺物からは明確にすることができなかったが、土層関係から弥生時代後期後葉から末までの時期が考えられる。535は滑石で、表面は研磨されている。時期は不明である。

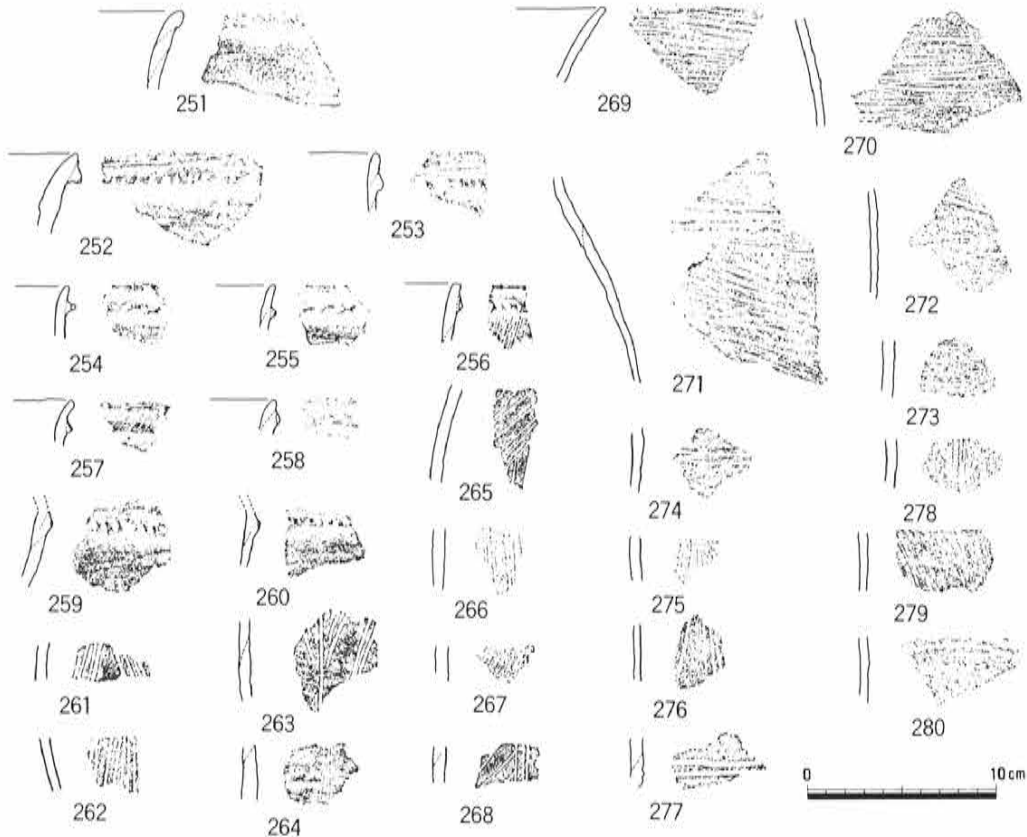
568～571は碧玉である。568は片面に自然面を残しているが、方柱を意識した剥離が施されており、管玉の素材と考えたい。569についても細かい調整痕が認められ、素材の可能性はある。570、571は製作工程で生じた剥片であろう。これらの碧玉の時期については、出土層位（第7図5層）から弥生時代後期後葉から末の時期が考えられる。

545は図の左および下側面に刃部が認められる。石鋸であろうか。

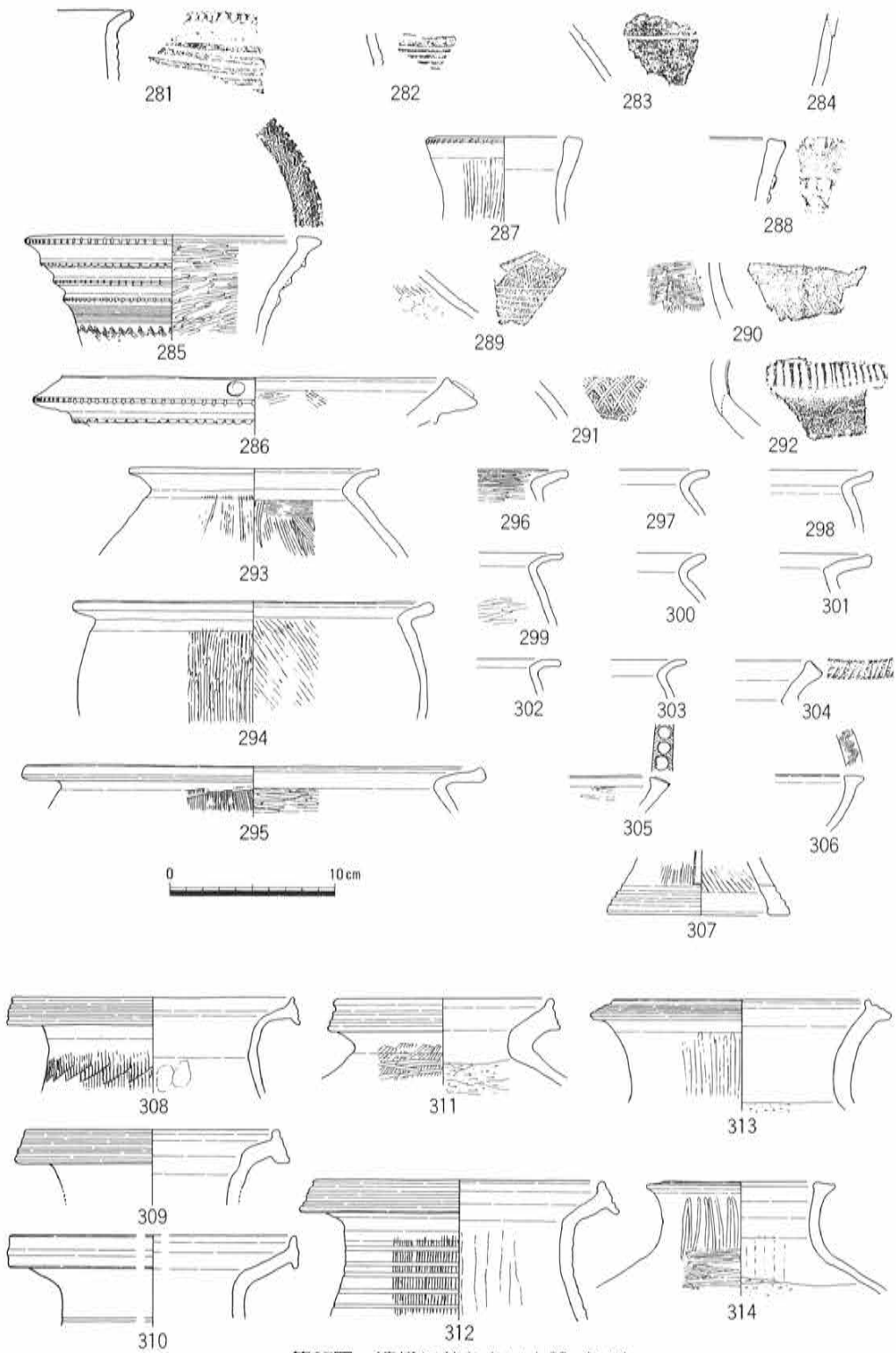
547は特殊な石製品である。図の右端の面は非常に丁寧に磨かれており、光沢をもっている。他の面もよく磨滅している。さらに側面を中心に擦痕とともに赤色顔料が付着している。図の網目部分は赤色顔料の残りの良い部分を示している。赤色顔料については分析を実施していないので不明であるが、ベンガラか朱を粉末にする工程ですり石として用いられた石製品かも知れない。時期は出土層位から弥生時代後期後葉から末と考えられる。

548～550は、いずれも各側面が光沢をもつ程によく研磨されているのが特徴である。何らかを擦る道具と考えられるが詳細は不明である。尚、550の上、下端面には叩き痕がある。

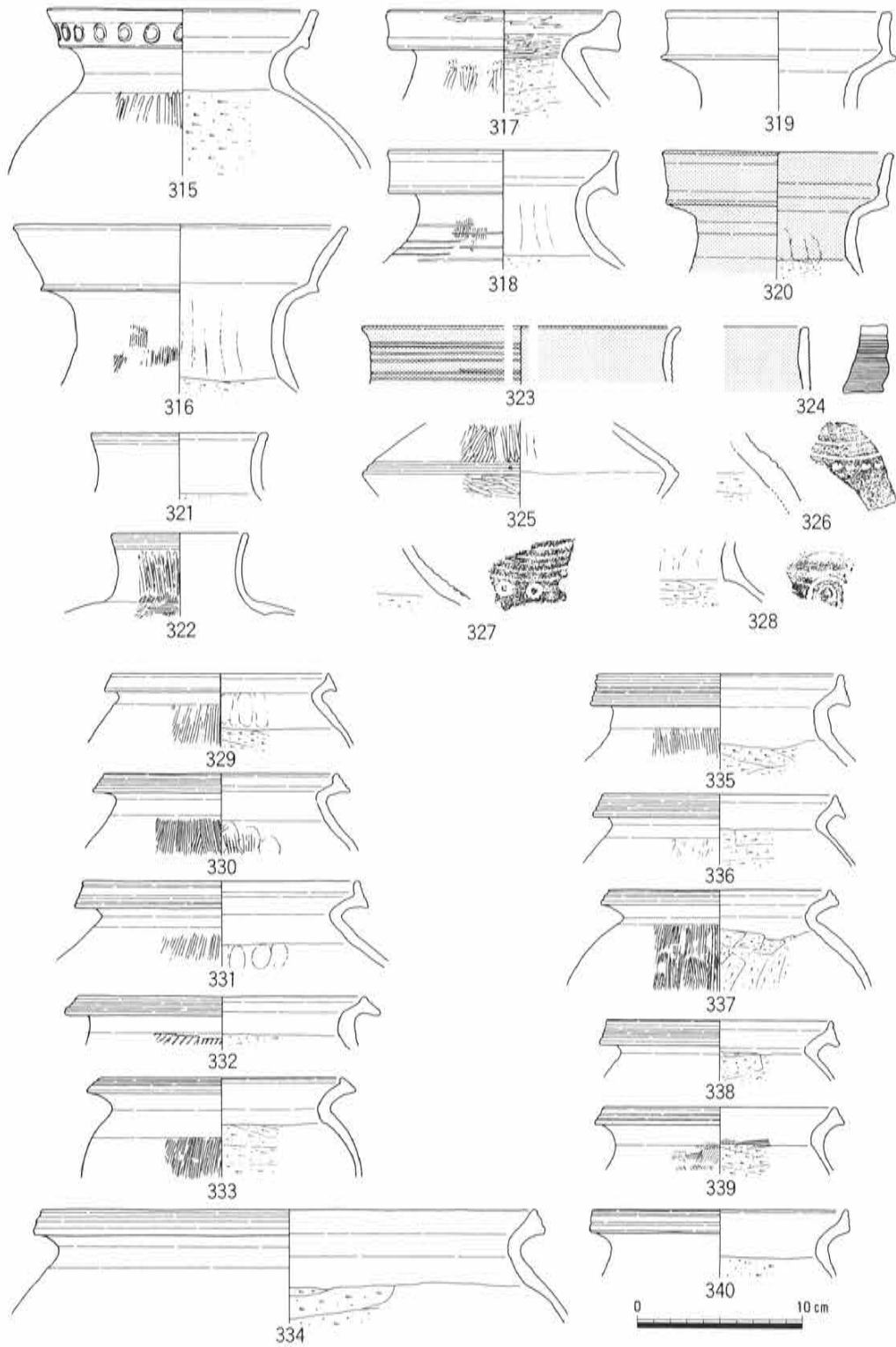
572～573は石鋸である。調査区南端の黒ボク層から出土したものである（第6図）。時期は特定できなかったが、縄文時代後期から晩期のものと考えられる。



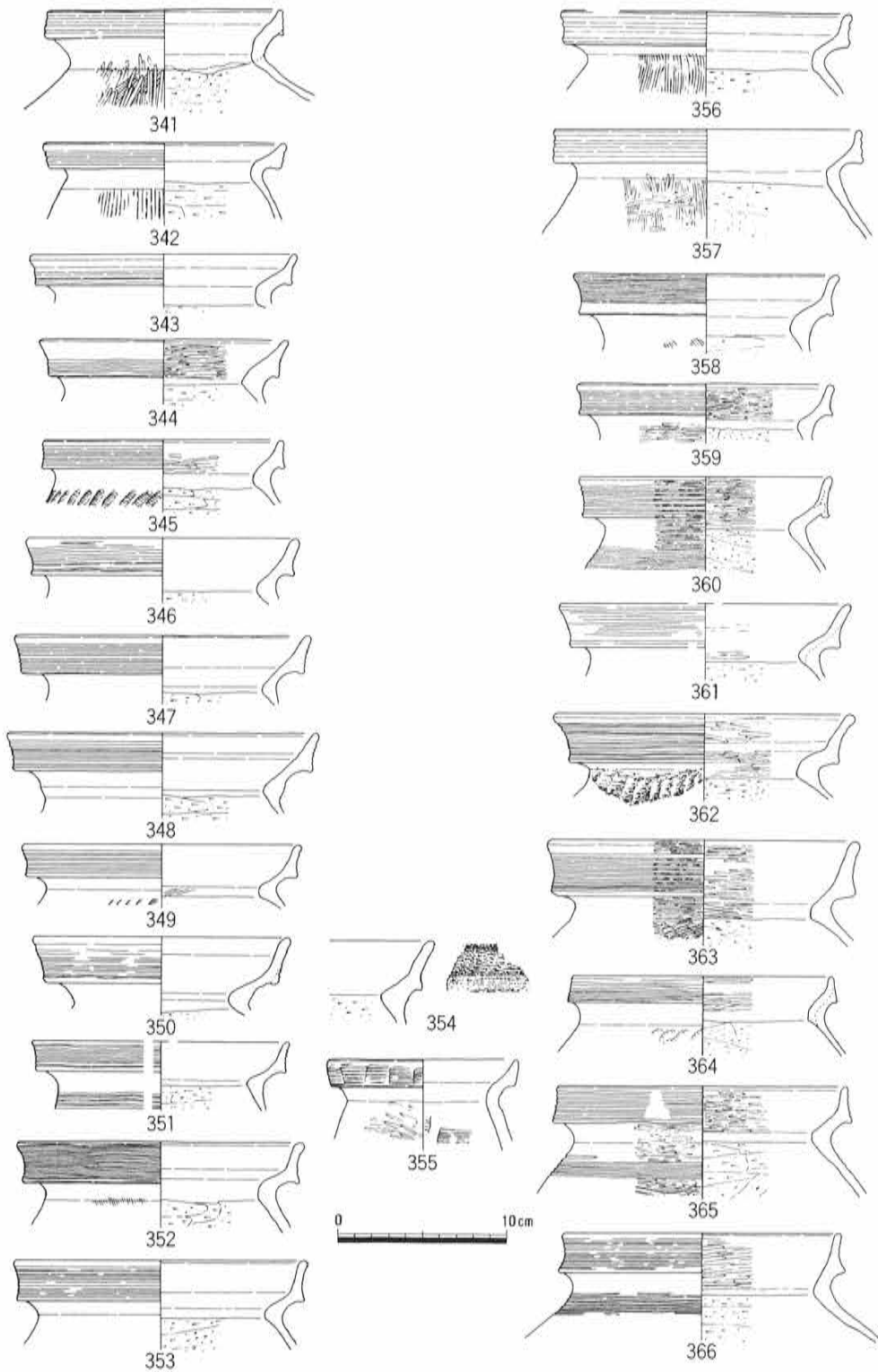
第26図 遺構に伴わない土器 (1/4)



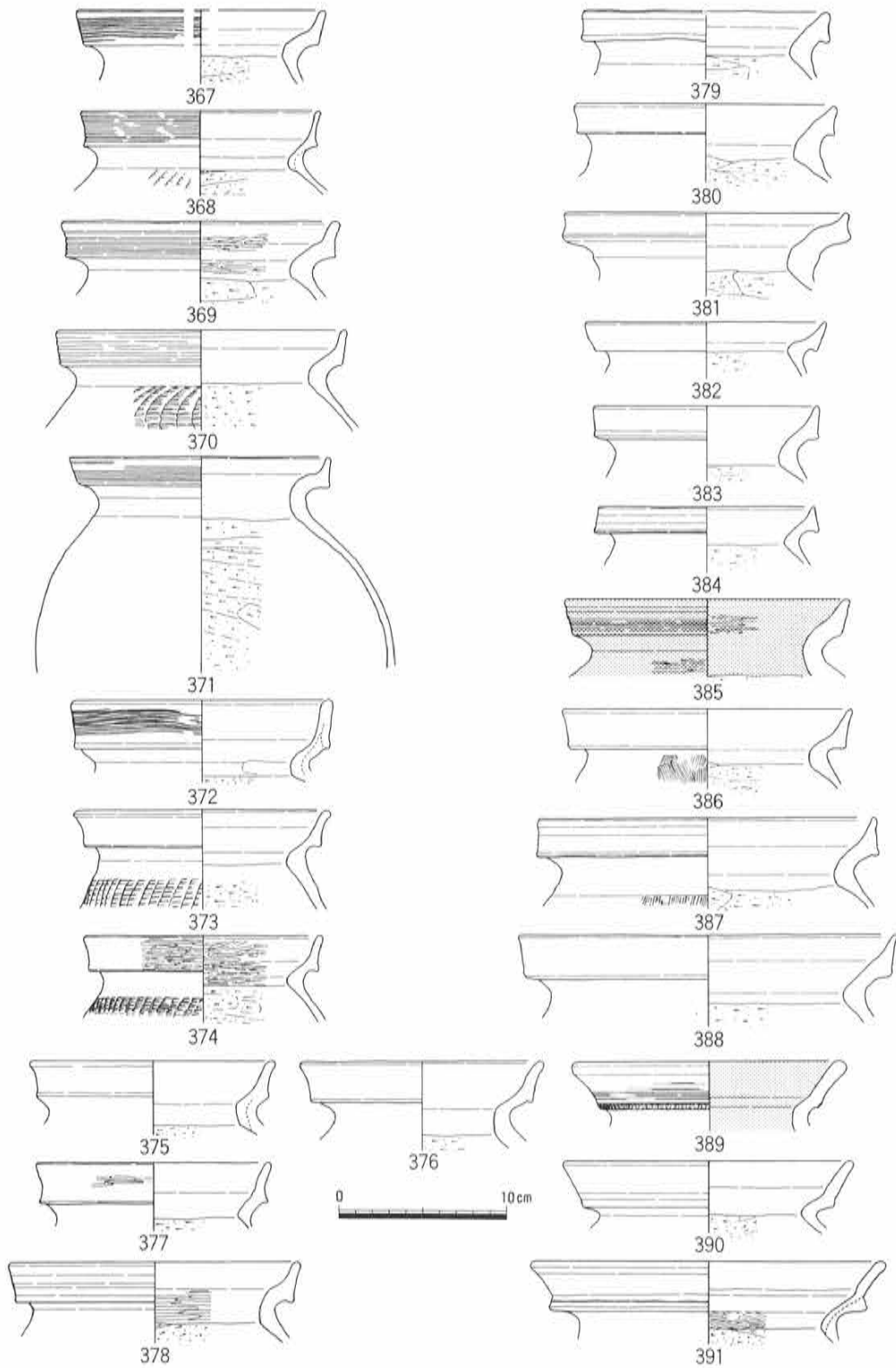
第27図 遺構に伴わない土器 (1/4)



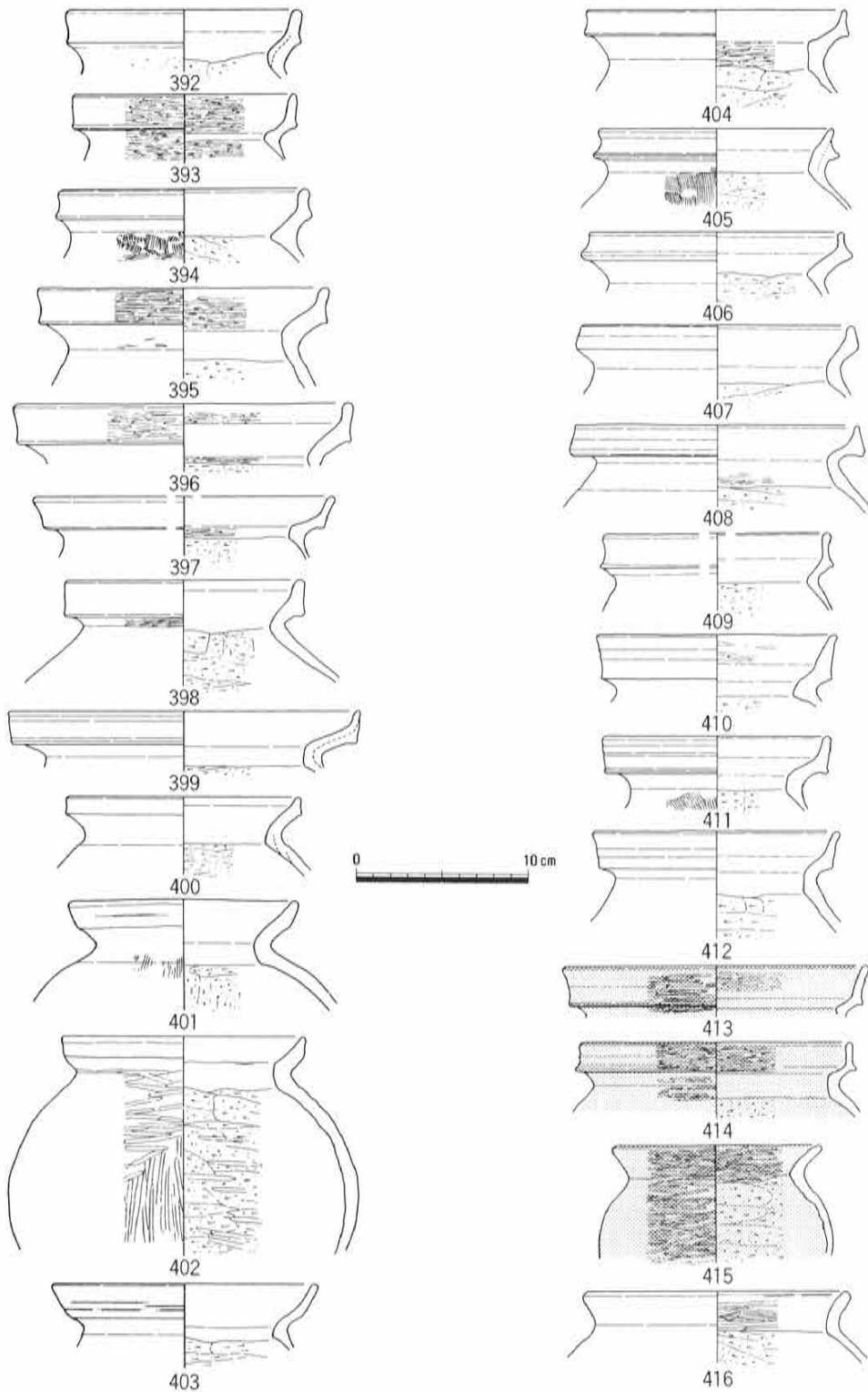
第28図 遺構に伴わない土器 (1/4)



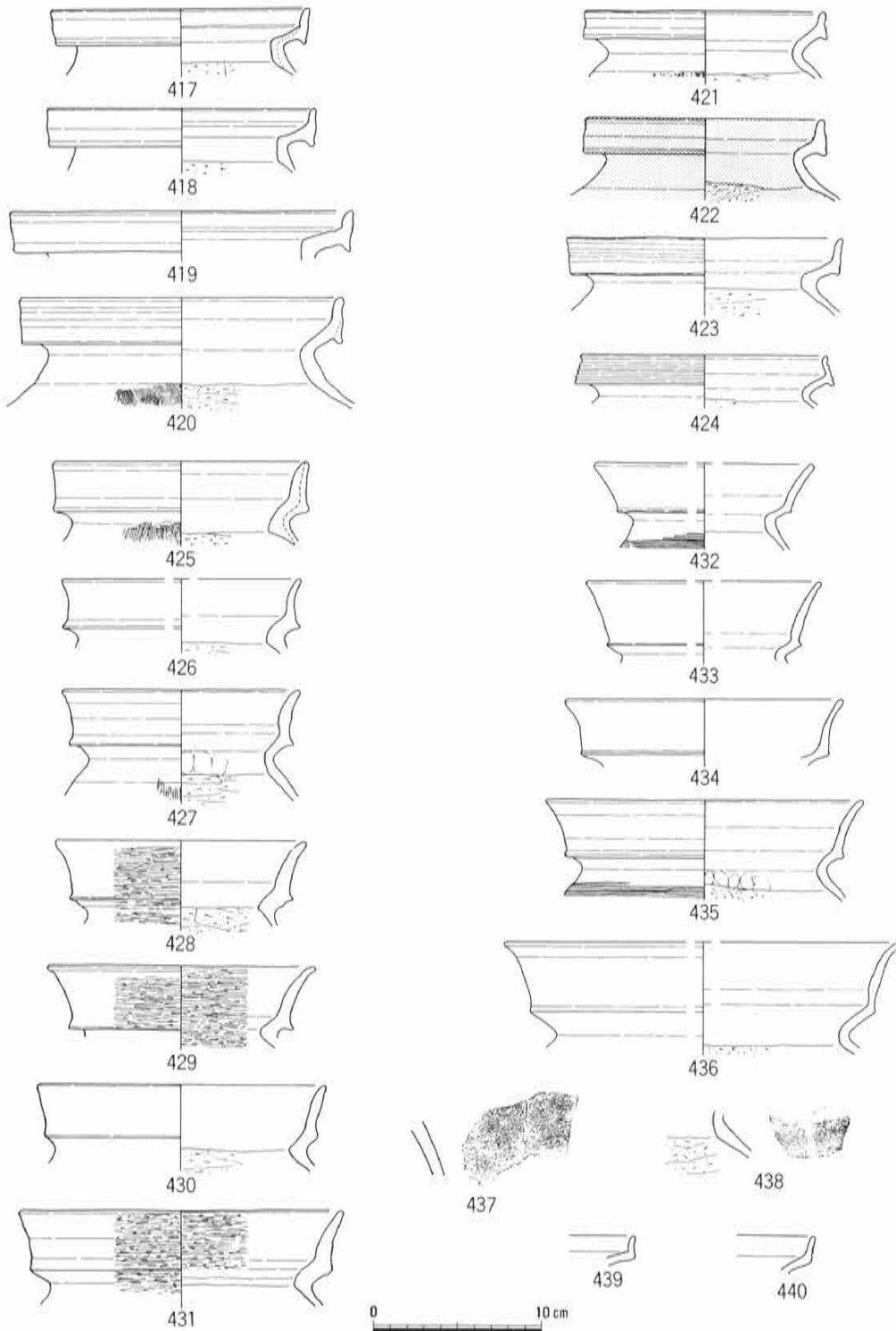
第29図 遺構に伴わない土器 (1/4)



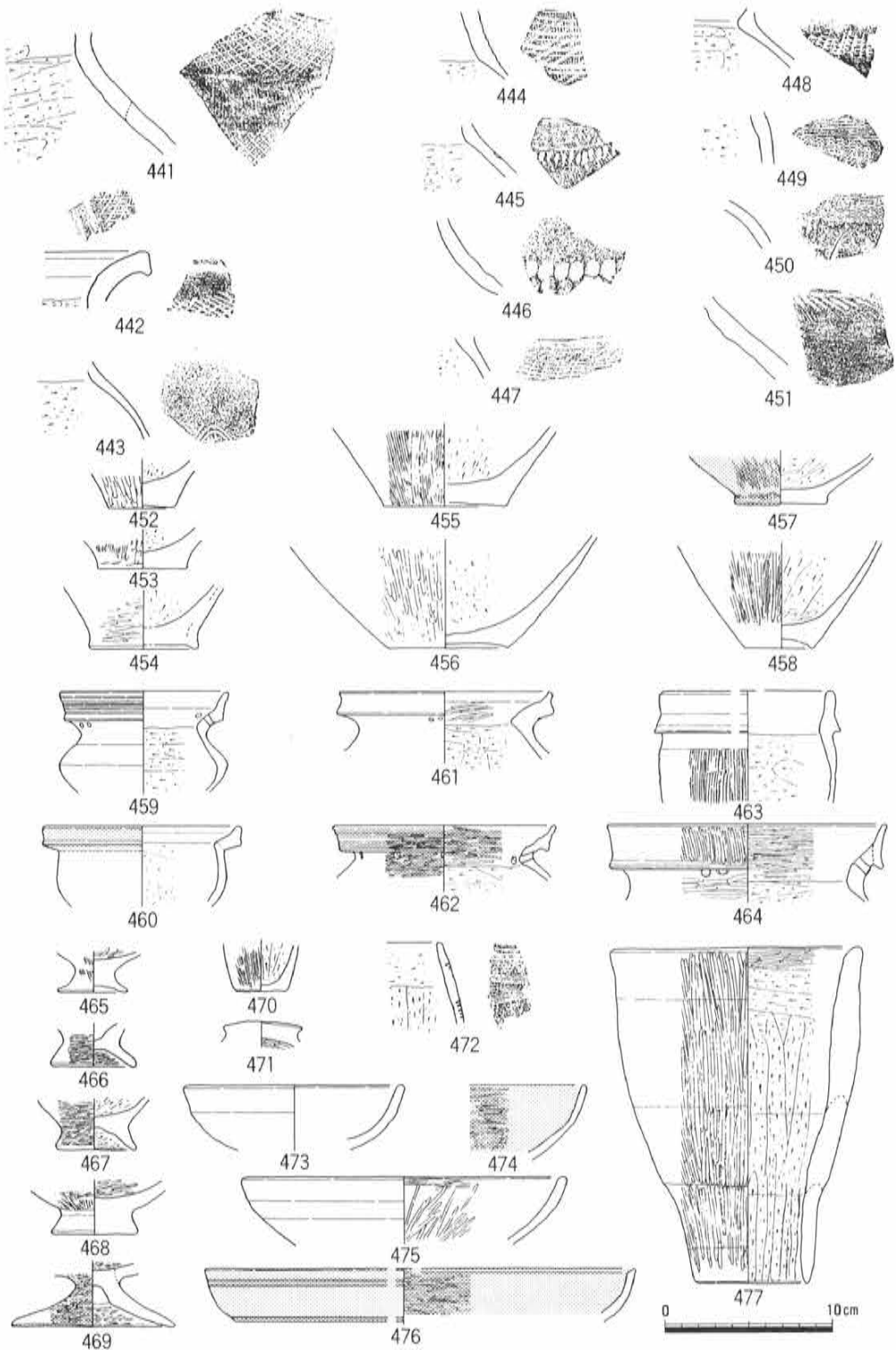
第30図 遺構に伴わない土器 (1/4)



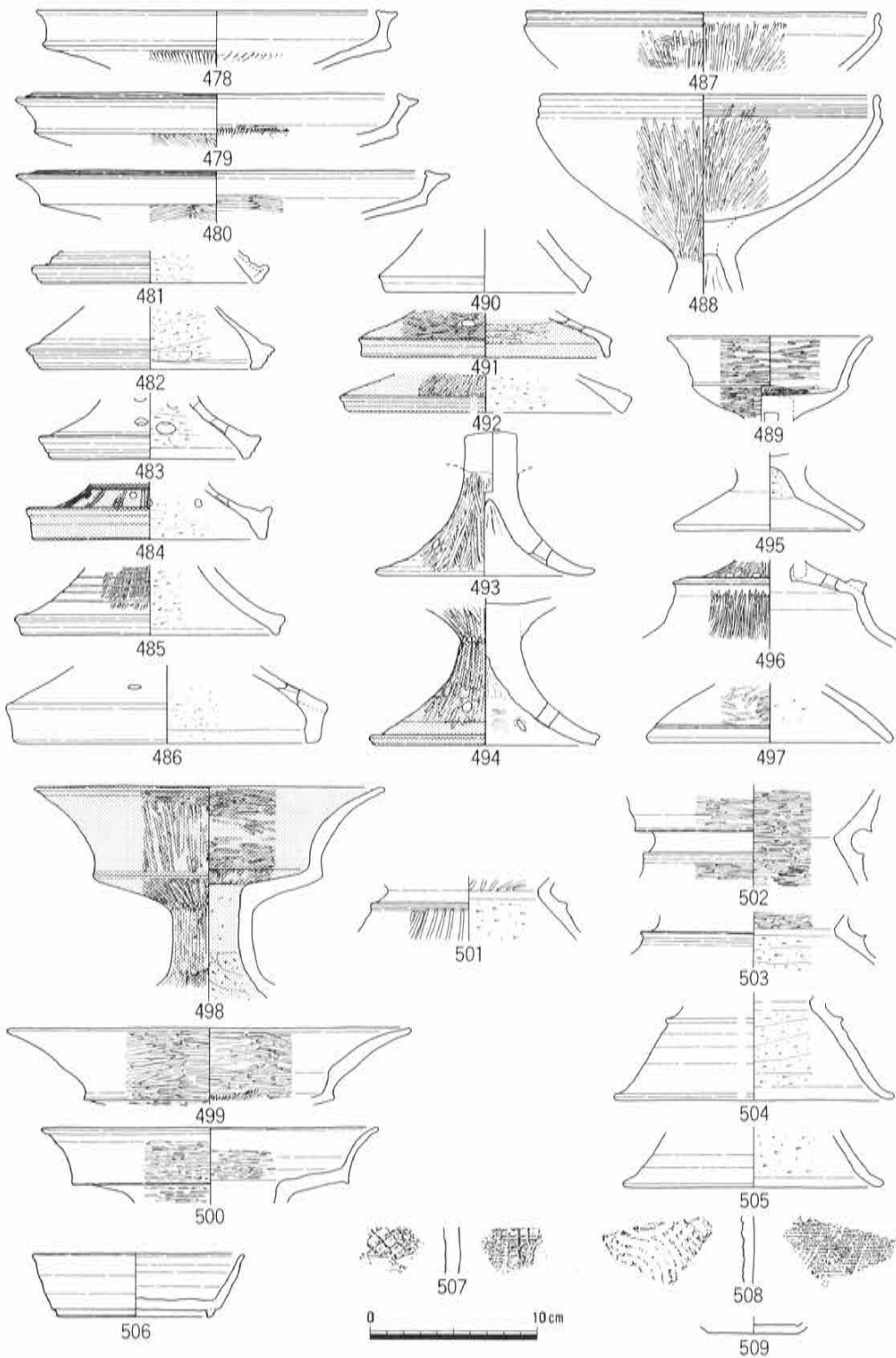
第31図 遺構に伴わない土器 (1/4)



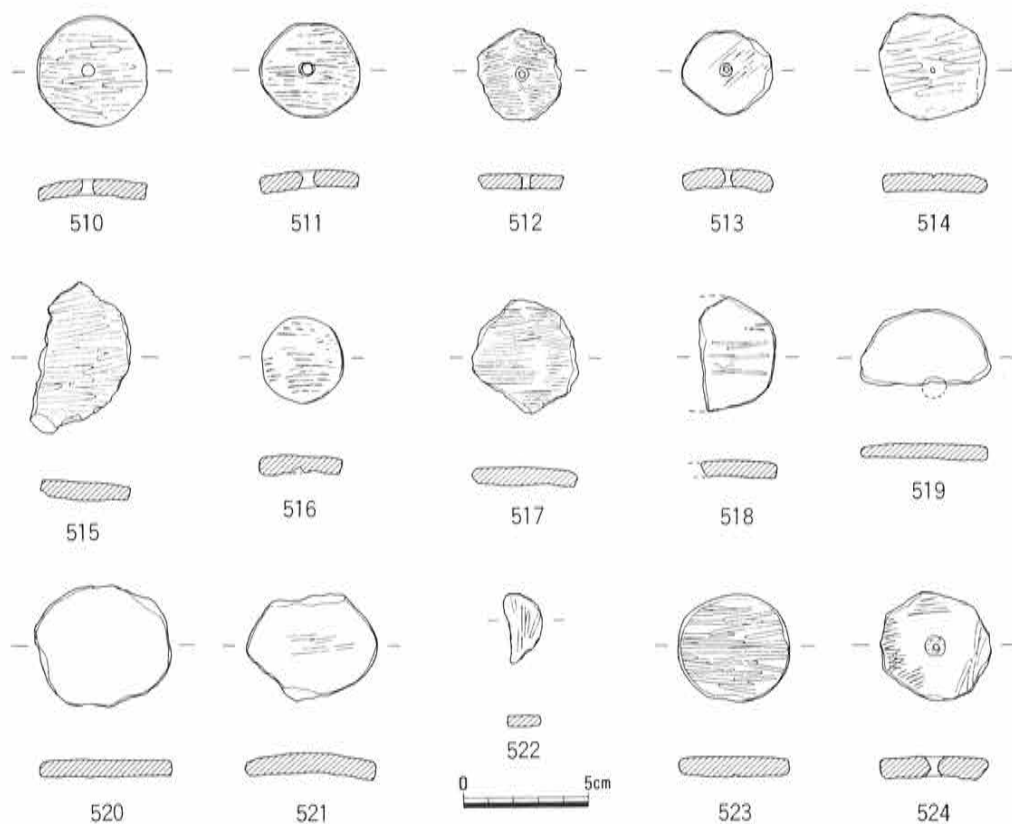
第32図 遺構に伴わない土器 (1/4)



第33図 遺構に伴わない土器 (1/4)



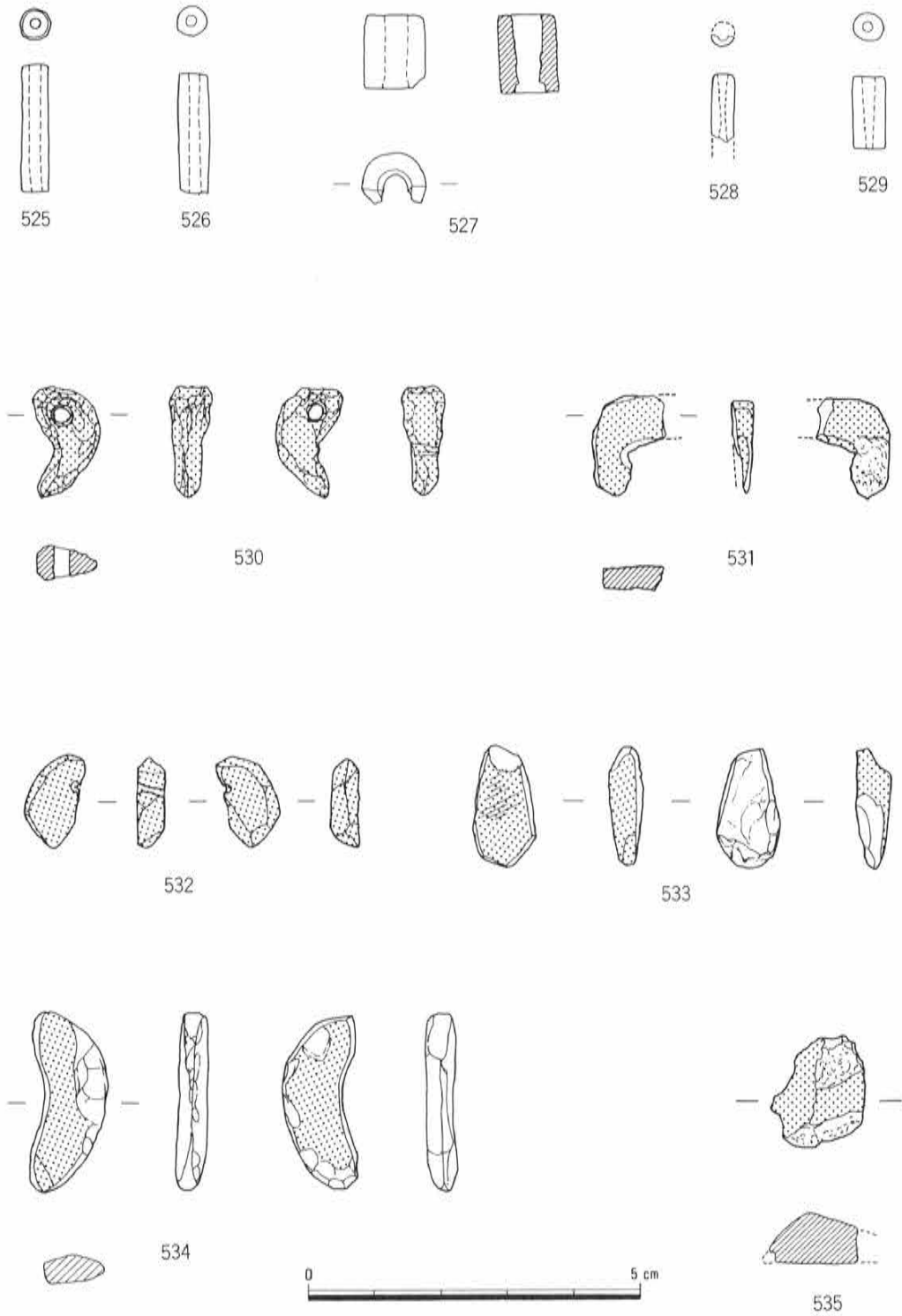
第34図 遺構に伴わない土器 (1/4)



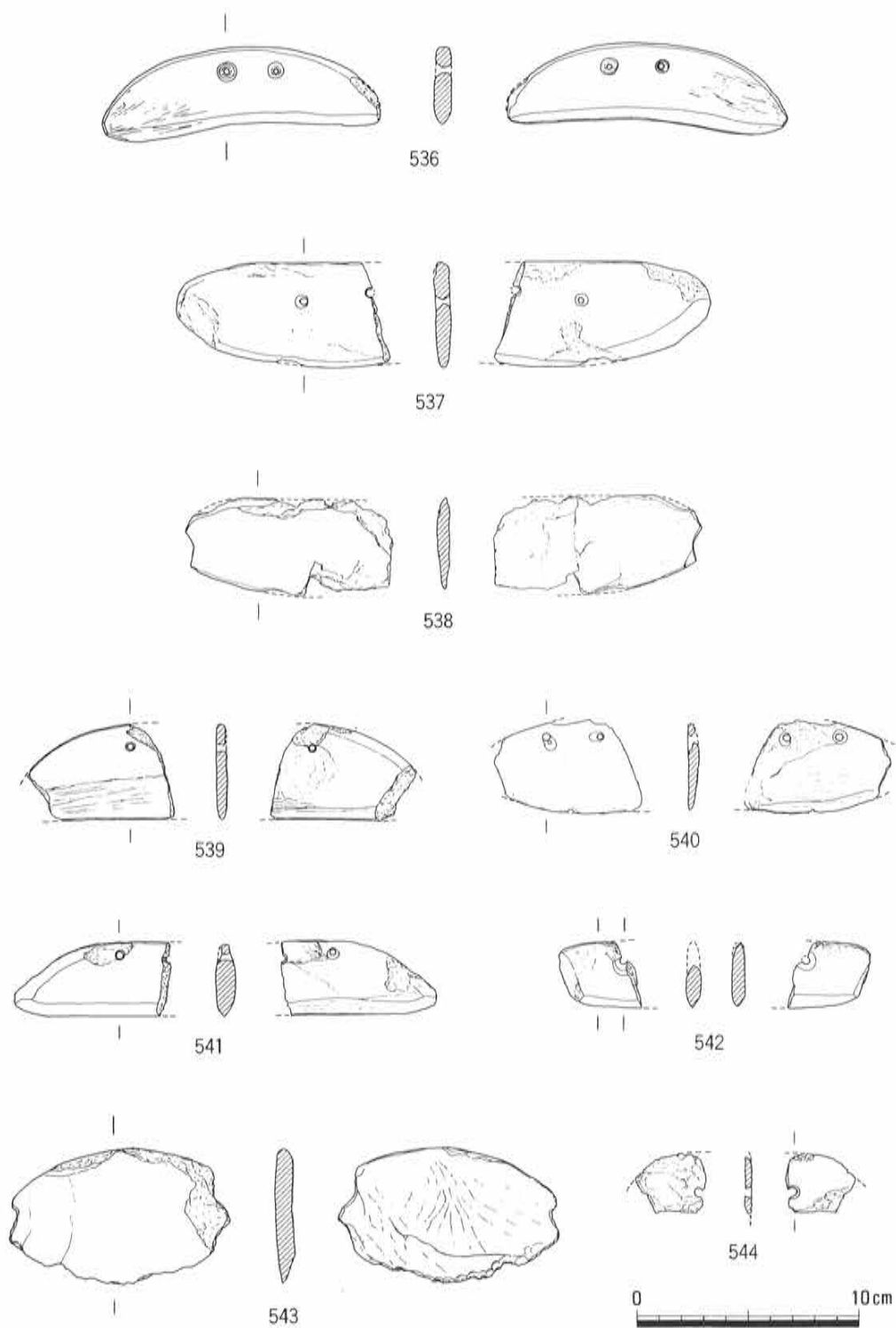
第35図 出土紡錘車 (1/3)

第1表 出土土製品一覽表

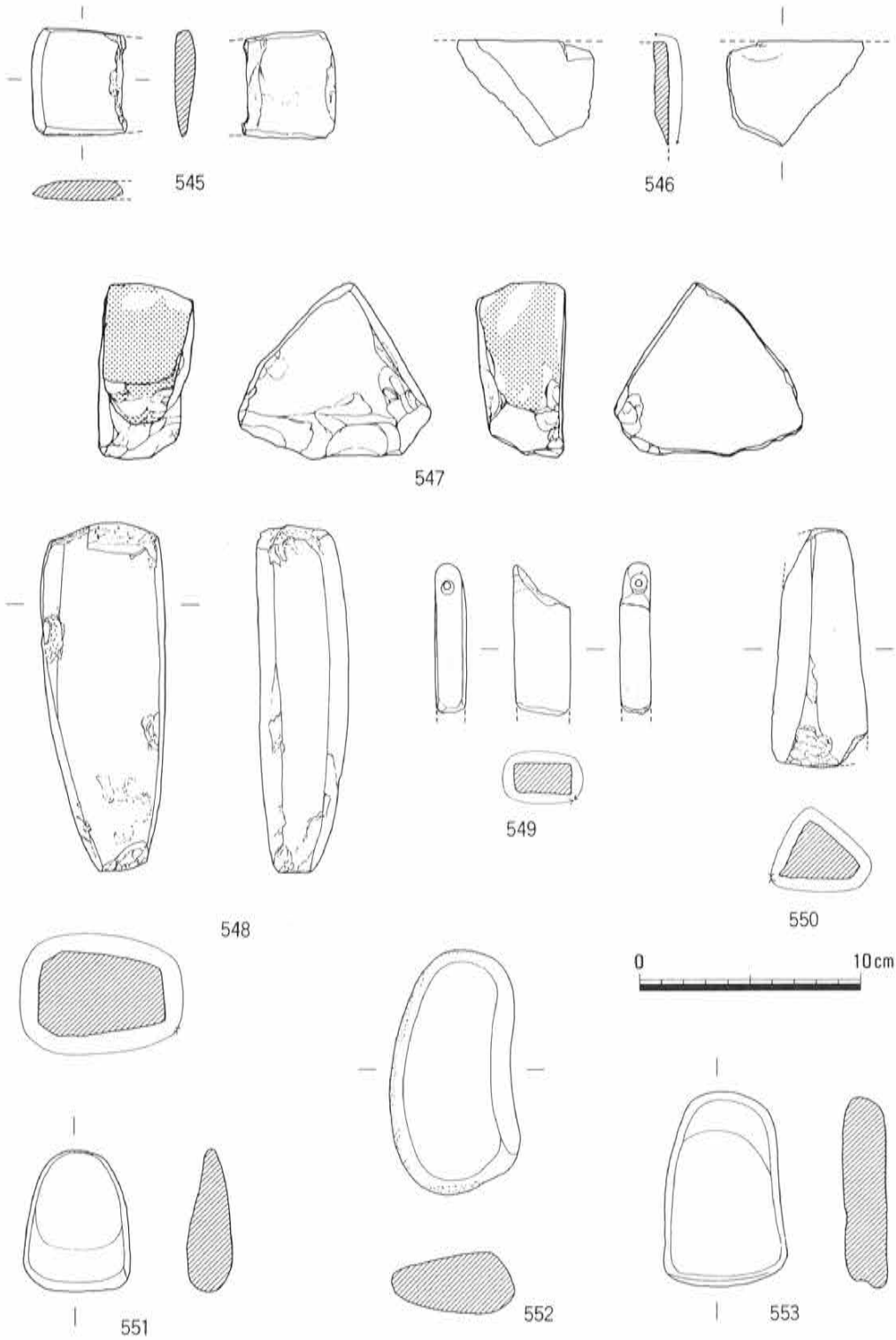
番号	器種	計測最大値 (mm)			重量 (g)	出土遺構	備考
		長	幅	厚			
510	紡錘車	43.4	43.3	7.0	15.84	1号住居跡	側面研磨。
511	"	39.6	37.3	7.0	12.58	"	"
512	"	36.0	32.5	6.0	8.60	"	"
513	"	34.2	37.0	8.0	12.00	"	側面一部研磨。
514	"	41.9	41.6	7.5	15.10	"	" 未製品。
515	"	58.4	35.4	7.0	17.14	"	未製品か。
516	"	33.0	32.7	7.5	9.55	"	側面研磨。未製品。
517	"	46.5	42.4	6.5	14.07	"	未製品か。
518	"	45.0	30.1	6.5	10.73	2号住居跡上層	側面研磨。未製品。
519	"	51.5	30.1	6.0	12.20	"	" 半欠か。
520	"	52.6	49.1	6.5	20.35	1号か2号住居跡	未製品。
521	"	52.0	39.6	8.0	22.27	"	側面研磨。未製品。
522	"	26.9	13.5	4.5	1.76	"	未製品か。
523	"	44.2	42.3	7.5	17.66	包含層	側面研磨。未製品。
524	"	43.6	43.5	8.5	19.28	"	"



第36図 出土石製品(1)(1/1)(網目は研磨部分)

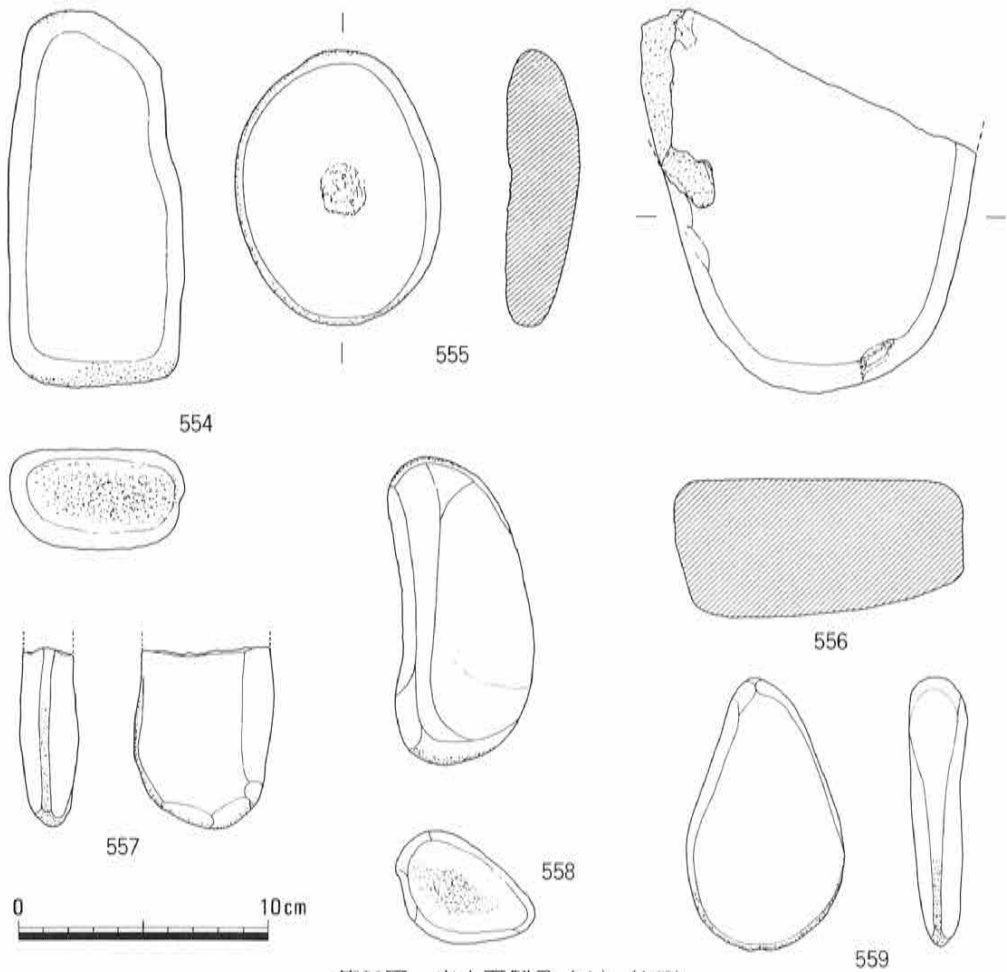


第37図 出土石製品(2) (1/3)



第38図 出土石製品(3) (1/3)

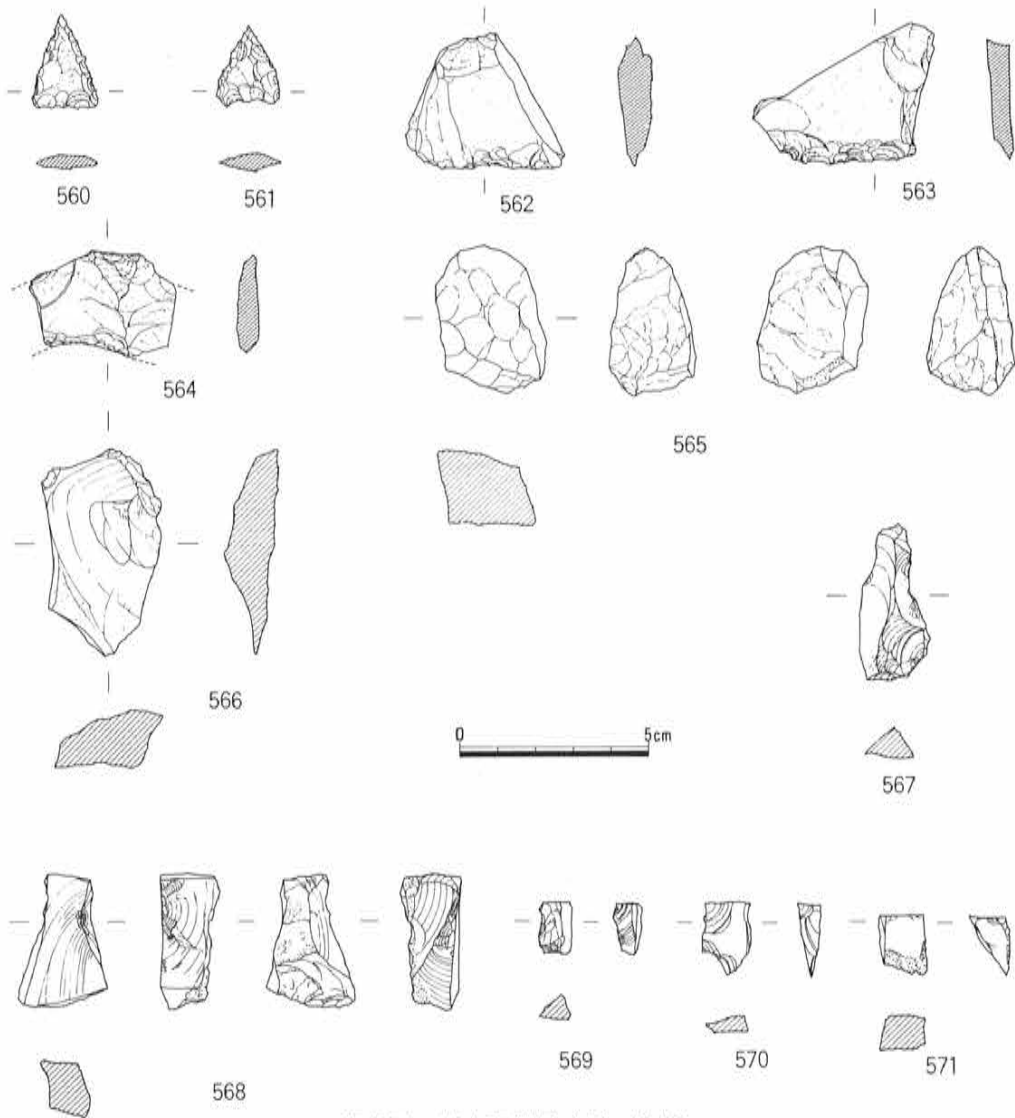
第3章 調査結果



第39図 出土石製品(4) (1/3)

第2表 出土石製品一覧表(1)

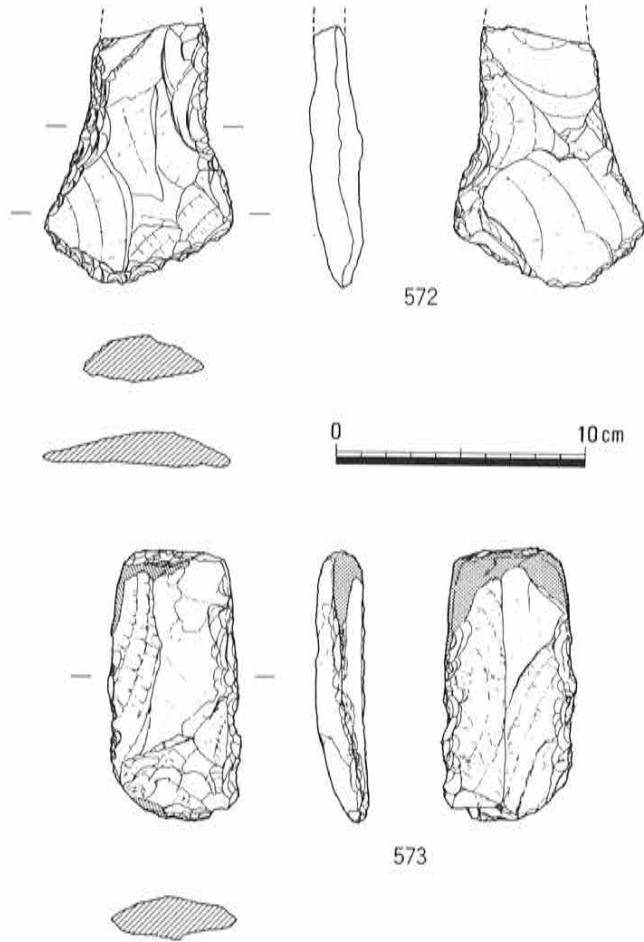
番号	器種	材質	計測最大値(mm)			重量(g)	出土遺構	備考
			長	幅	厚			
525	管玉	蛇紋岩(硬度2)	19.0	4.5	1.3	0.53	2号住居跡下層	床面上5~10cm
526	"	蛇紋岩(硬度2)	18.0	4.5	1.2	0.57	2号住居跡柱穴	P-4の東の柱穴
527	"	碧玉	11.0	9.0	2.5	0.87	2号住居跡上層	
528	"	碧玉(玉髓)	10.3	3.4	1.2	0.07	3号住居跡床面	
529	"	玉髓	11.0	4.5	1.5	0.39	"	
530	勾玉	蛇紋岩(硬度2)	16.5	9.0	6.5	0.84	表採	工事による排土中
531	"	蛇紋岩	15.0	11.0	3.5	0.63	包含層	第7図5層 (弥生後期後葉~末)
532	"	蛇紋岩	13.3	7.5	3.6	0.63	"	"
533	"	滑石(硬度1)	18.0	9.9	5.0	0.52	3号住居跡	貼り床除去中
534	勾玉	蛇紋岩(硬度3~2)	27.0	9.5	4.5	1.79	2号住居跡上層	
535	"	滑石	13.0	14.0	8.0	2.31	包含層	
536	石包丁	綠色片岩	125.0	34.5	8.0	64.47	表採	工事による排土中
537	"	滑石片岩	97.0	47.5	7.5	46.31	2号住居跡上層	
538	"	絹結晶片岩	94.0	44.5	6.0	33.93	1号住居跡	
539	"	綠色晶片岩	66.0	43.0	5.0	21.59	包含層	弥生時代後期
540	"	絹雲母片岩	66.0	42.0	6.0	17.79	3号住居跡	
541	"	綠色晶片岩	71.0	34.0	9.0	30.49	包含層	弥生時代後期
542	"	滑石片岩	37.5	30.0	6.0	9.70	"	"
543	"	綠色片岩	99.5	61.0	7.5	61.70	"	"



第40図 出土石製品(5)(1/2)

第3表 出土石製品一覽表(2)

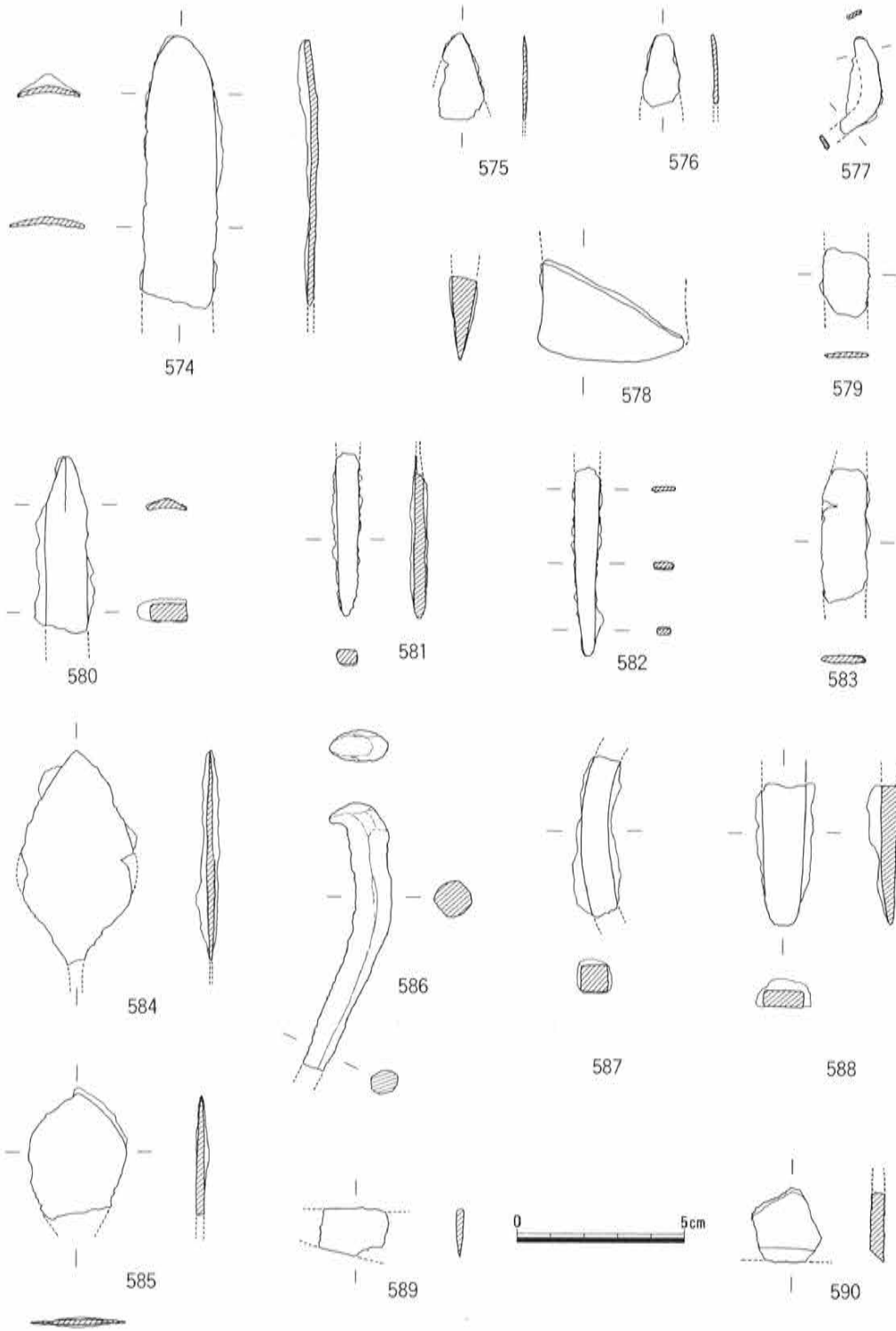
番号	器種	材質	計測最大値(mm)			重量 (g)	出土遺構	備考
			長	幅	厚			
544	石包丁		32.0	26.5	3.0	4.85	包含層	
545	石鋸か	滑石片岩	48.0	41.0	9.0	28.94	"	弥生時代末か
546		結晶片岩	62.0	47.5	7.0	28.92	1号か2号住居跡	
547	すり石	流紋岩	79.0	86.5	40.5	362.03	包含層	第7図5層赤色顔料付着
548	"	"	157.0	56.0	40.0	592.55	1号住居跡	
549	"	流紋岩(?)	67.7	25.4	13.8	43.68	包含層	第7図5層
550	"	流紋岩	105.3	42.3	26.0	159.10	表	工事による排土中
551	"	"	64.0	47.0	20.5	100.06	1号住居跡	
552	叩石		111.5	55.5	27.5	308.64	"	
553	すり石		87.0	56.0	19.5	183.98	"	
554	叩石		150.5	70.0	40.0	848.50	4号土壌	
555	"		110.0	82.0	28.0	349.28	"	



第41図 出土石製品(6)(1/3)

第4表 出土石製品一覧表(3)

番号	器種	材質	計測最大値(mm)			重量 (g)	出土遺構	備考
			長	幅	厚			
556	砥石		153.0	116.0	55.0	1,550.00	2号住居跡上層	
557	叩石		71.5	54.0	23.5	130.25	"	
558	"		123.0	55.0	43.5	398.95	包含層	
559	"		108.0	62.0	23.0	214.43	"	
560	石鏃	サヌカイト	24.5	17.5	3.5	1.50	2号住居跡下層	
561	"	サヌカイト	20.0	17.0	5.0	1.22	3号住居跡	
562	"	サヌカイト	43.0	36.1	10.1	15.63	2号住居跡上層	クサビか
563	"	サヌカイト	48.5	36.0	6.0	12.12	包含層	
564	"		39.0	27.0	6.0	7.80	表採	工事による排土中
565	"	石英岩	39.5	27.5	23.0	29.90	"	
566	"	硬質真岩	55.0	32.0	15.5	22.87	1号住居跡	
567	"	曜石	41.8	18.2	7.6	4.51	包含層	
568	"	碧玉(玉髓)	35.5	24.0	16.0	13.54	"	第7図4か5層
569	"	碧玉(玉髓)	13.6	7.0	6.5	0.96	"	第7図5層
570	"	碧玉(玉髓)	19.1	12.3	5.6	1.33	"	"
571	"	碧玉(玉髓)	14.9	8.3	8.5	2.09	"	"
572	石鏃	山安山岩	105.0	75.5	20.0	141.14	"	縄文時代
573	"	緑色片岩	109.0	54.5	20.0	154.61	"	"



第42図 出土鉄器 (1/2)

第5表 出土鉄器一覧表

番号	器種	計測最大値 (mm)			重量 (g)	出土遺構	備考
		長	幅	厚			
574	鉈	81.0	23.5	2.0	21.80	2号住居跡床面	床面上約5cm 弥生時代後期
575	鉈か	26.0	13.5	1.5	1.29	1号住居跡床面	
576	鉈	22.0	11.0	2.0	1.06	"	
577		30.5	10.5	1.5	2.06	"	
578	斧	27.0	42.0	8.0	22.36	2号住居跡下層	
579	鉈か	20.5	14.5	2.0	2.30	2号住居跡床面	
580	鉈	52.0	18.0	5.0	11.53	包含層	
581	鎌か	49.0	6.5	4.0	4.05	2号住居跡下層	
582	"	56.5	7.5	2.5	3.01	2号住居跡床面	
583		40.0	15.0	2.0	4.07	2号住居跡上層	
584	鎌	56.5	32.5	7.0	19.41	包含層	弥生時代末か
585	"	36.0	29.0	2.5	8.77	"	"
586	釘	80.0	12.0	12.0	19.73	"	
587		48.5	14.0	8.0	14.47	"	
588	鉈	41.5	13.0	9.0	10.45	"	弥生時代後期か
589	刀子	14.5	21.0	2.0	2.45	"	弥生時代末か
590		22.0	19.5	4.0	5.82	"	

出土土器観察表について

「調整の特徴」におけるAは壺、甕、鉢、高杯などの口縁部、Bは壺などの頸部、Cは壺、甕、鉢などの体部外面、Dは壺、甕、鉢などの体部内面、Eは底部、Fは高杯、器台などの杯部、Gは高杯、器台などの脚部をさしている。また、「色調」については『新版標準土色帖（1988年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づいて記入しており、基本的には外面の色調を示している。さらに、胎土については、ほとんどの土器に、0.5～4mm前後の砂粒（石英、長石、雲母、黒色の砂粒、橙色のシャモット）が含まれており、一部特殊な胎土の土器は備考欄に記入している。なお、縄文土器にはシャモットは認められず、弥生中期の土器に含まれる砂粒は少量で、2mm以下の細かいものである。

第6表 出土土器観察表

番号	器種	調整の特徴	色調	備考
1	壺	A・B、ヨコナデ。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、5YR 7/4	
2	"	A・B、ヨコナデ。	灰白、5YR 8/1	
3	甕	A、ヨコナデ。C、ハケメ。	"、10YR 8/2	
4	高杯	A、4～5条の凹線文。F、内外ヘラミガキ。	橙、5YR 6/6	円板充填
5	"	G、外面櫛描文。端部2条の凹線文。内面ヘラケズリ。	赤褐、5YR 4/8	外面丹塗り、雲母・角閃石含む
6		F、内外ヘラミガキ。	灰白、5YR 8/1	
7	蓋	外面指頭押え。	にぶい黄橙、10YR 7/2	外面煤
8	蓋か	外面ヘラミガキ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	端部に煤。蓋として使用か？
9	高杯	F、外面凹線ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。G、外面ヘラミガキ。	浅黄橙、7.5YR 7/3	穿孔は3か所
10	"	G、外面ヘラミガキ。内面シボリ。ヘラケズリ。ハケメ。	灰白、10YR 8/2	外面丹塗り
11	杯	F、内面ヘラミガキ。	浅黄橙、10YR 8/3	
12	高杯	F、内外ヘラミガキ。G、外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	明赤褐、2.5YR 5/6	外面丹塗り
13	壺	A、3条の凹線。	にぶい黄橙、10YR 6/3	
14	"	"。B、外面ハケメ、刺突文。	"、10YR 7/4	
15	"	A、4条の凹線。	橙、2.5YR 7/6	
16	"	A、3条の凹線。B、外面ハケメ、円形刺突文。内面ハケメ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	

第3章 調査結果

69	甕	A、外面7条の櫛描沈線。 " 。 C、ハケメ。	浅黄橙、10YR 8/3	外面煤
70	鉢	A、外面5条単位の櫛描沈線。 D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
71	甕	A、ヨコナデ。 C、ハケメ、刺突文。 D、ヘラミガキ。ヘラケズリ。	浅黄橙、10YR 8/3	
72	"	A、ヨコナデ。 C、板による刺突文。 D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
73	甕	A、内面ヘラミガキ。 D、ヘラケズリのちヘラミガキ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	外面煤
74	"	A、ヨコナデ。	浅黄橙、7.5YR 8/4	口縁部外面煤
75	"	外面板ナデ。内面ヘラケズリ。	にぶい赤褐、5YR 4/3	外面煤
76	"	外面ヘラミガキ。 " 。	にぶい黄橙、10YR 6/3	内面煤
77	"	" " " 。	橙、7.5YR 6/6	
78	"	内面ヘラミガキか。	灰黄褐、10YR 5/2	
79	"	外面櫛描波状文。内面ヘラケズリ。	赤褐、10R 4/4	外面丹塗り
80	"	外面貝殻刺突文。 " 。	にぶい褐、7.5YR 6/3	
81	鉢	外面ハケメ。内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙、10YR 7/4	内面丹塗り
82	"	A、3条の凹線。 C、ハケメ。 D、ヘラケズリ。	浅黄橙、7.5YR 8/6	
83	高杯	F、端部3条の凹線。内外面ヘラミガキ。	明赤褐、5YR 5/8	
84	"	端部2~3条の凹線。杯部外面ヘラミガキ。	橙、7.5YR 7/6	
85	"	外面櫛描沈線。	"、2.5YR 6/6	
86	"	外面櫛描沈線文。刺突文。	浅黄橙、7.5YR 8/4	
87	"	外面ヘラ描沈線。端部2条の凹線。内面ヘラケズリ。	橙、5YR 6/6	
88	"	外面刺突文。刻目文。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
89	"	A、2条の凹線。 C、ハケメ。3条の凹線。 D、ヘラミガキ。	橙、5YR 6/6	
90	甕	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	"、7.5YR 6/8	
91	壺	A、4条の凹線。 B、ハケメのちヘラ描沈線。	浅黄橙、10YR 8/4	
92	"	A、櫛描沈線。 B、竹管文。 C、ヘラミガキ。 D、ヘラケズリ。	赤褐、10R 5/4	外面丹塗り
93	"	A、3条の凹線。 D、ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 5/4	穿孔1か所残
94	"	" " C、刺突文。 D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
95	"	A、ヨコナデ。 D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	外面煤
96	甕	" " C、ヘラミガキ。 D、ヘラケズリ。	橙、5YR 6/8	
97	"	A、内外面ヘラミガキ。 D、ヘラケズリ。	明赤褐、2.5YR 5/6	内外面丹塗り
98	"	A、内面指頭押え。 " 。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
99	"	A、内外面ヘラミガキ。 " " 。	" "、7.5YR 7/4	
100	"	A、2条の凹線。 C、ハケメ。 D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
101	"	A、ヨコナデ。 C、ハケメ。 D、指頭押え。	"、 "	外面煤
102	"	" " " " D、指頭押え。ヘラケズリ。	にぶい赤褐、5YR 5/4	"
103	"	A、3条の浅い凹線。 C、ハケメ。 D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
104	"	A、外面粗い櫛描沈線。内面ヘラミガキ。 D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	
105	"	A、4条の凹線。 C、ハケメ。 D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面煤
106	"	" " " " " 。	明褐灰、7.5YR 7/2	内面一部煤
107	"	A、外面櫛描沈線。内面ヘラミガキ。	灰褐、7.5YR 4/2	
108	"	A、外面粗い櫛描沈線。内面ヘラミガキ。 C、粗い櫛描沈線。	にぶい黄橙、10YR 7/4	
109	"	" " " " C、ハケメ。	橙、7.5YR 7/6	外面煤
110	壺	C、櫛描文。 D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/4	
111	甕	A、内面ヘラミガキ。	浅黄橙、10YR 8/4	剝落
112	"	外面に櫛描波状文、平行線文。	にぶい黄橙、10YR 6/3	外面煤
113	甕	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	黒褐、10YR 2/2	
114	"	" " " " 。	にぶい黄褐、10YR 5/3	
115	"	内面指頭押え。	橙、5YR 6/6	
116	"		浅黄橙、10YR 8/4	剝落
117	高杯	内外面ヘラミガキ。	橙、5YR 7/8	
118	"	" " " " " 。	"、7.5YR 6/6	
119	鉢	外面ハケメのちヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	にぶい褐、7.5YR 6/3	内面丹塗り
120	高杯	内外面ヘラミガキ。	明赤褐、2.5YR 5/6	内外面丹塗り
121	壺	A、ヨコナデ。 B、ハケメのち沈線。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
122	"	外面ヘラミガキ。	赤褐、2.5YR 4/6	内外面丹塗り
123	甕	A、外面9条の櫛描沈線。端部刻目。内面ヘラミガキ。	明赤褐、2.5YR 5/8	
124	"	A、外面櫛描沈線。 C、貝殻刺突文。 D、ヘラケ	橙、7.5YR 6/6	

125	甕	ズリ。 A、貝殻沈線のちヨコナデ。 " " "	にぶい橙、7.5YR 6/4	
126	"	A、3条単位の櫛描沈線。 " " "	" " "	
127	"	A、外面5条の凹線。内面一部ヘラミガキ。C、貝殻押し文。	浅黄橙、10YR 8/3	外面煤
128	"	A、外面櫛描沈線。内面ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。	灰黄褐、10YR 6/2	
129	"	A、7条の粗い櫛描沈線。C、板による刺突文。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面煤
130	鉢か	A、外面櫛描沈線。内面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	
131	甕	A、内面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/3	外面煤
132	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	"
133	"	" " " C、ヘラミガキか。D、ヘラケズリ。	黄橙、7.5YR 7/8	
134	"	" " " D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面煤
135	"	" " " "	" " 10YR 7/4	"
136	"	" " " D、ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 6/2	"
137	"	A、2条の凹線。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	にぶい褐、10YR 6/2	"
138	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
139	"	" " " C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
140	"	A、3条の凹線。C、ヨコナデ。D、指頭押え。ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	
141	"	A、内面ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	" " "	
142	"	A、ヨコナデ。C、ハケメのち指ナデ。 " "	褐、7.5YR 4/4	外面煤
143	"	A、内面ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
144	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	浅黄橙、10YR 8/3	
145	"	" " " C、ハケメのち刺突文。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
146	"	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 6/3	
147	"	内面ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 5/3	
148	"	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	" " 7.5YR 6/3	
149			にぶい橙、7.5YR 6/4	剝落。外面丹塗り
150		外面ハケメのちヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	" " 7.5YR 7/3	
151		外面板による刺突文。内面指頭押えのちハケメ。	" " 7.5YR 7/4	
152		外面にヘラ描き刺突文。	" " 7.5YR 7/3	
153		外面に櫛描波状文。内面ヘラケズリ。	にぶい黄褐、10YR 5/3	
154		外面にヘラ描沈線文。 " " "	にぶい黄橙、10YR 7/3	
155		外面貝殻刺突文。 " " "	にぶい赤褐、5YR 5/4	
156		" " " " " "	灰黄褐、10YR 6/2	
157		外面ハケメのち板による刺突文。	褐灰、10YR 5/1	
158	鉢	A、4条の凹線。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラミガキ。	橙、2.5YR 6/6	
159	"	A、外面櫛描沈線。内面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、5YR 6/4	外面煤
160		外面3条の沈線と竹管文。	赤、10R 4/6	外面丹塗り
161	高杯	端部5条の凹線。内外面ヘラミガキ。	橙、7.5YR 7/6	
162	"	内外面ヘラミガキ。	明赤褐、5YR 5/6	
163	"	端部2条の凹線。内面ヘラケズリ。	赤、10R 5/6	
164	"	内面ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	
165	"	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	赤褐、2.5YR 4/6	外面丹塗り
166	"	" " " 端部3条の凹線。内面ヘラケズリ。	浅黄橙、10YR 8/3	
167	"	G、外面ヘラミガキ。端部3条の凹線。 " " "	橙、7.5YR 7/6	
168	器台	内外面ヘラミガキ。	にぶい橙、5YR 6/4	
169	"	外面ヘラミガキ。	明赤褐、2.5YR 5/6	内外面丹塗り
170	"	A、7条の凹線。内面ヘラケズリのちヘラミガキ。	橙、2.5YR 6/6	
171	"	外面ヘラミガキ。端部7条の凹線。	浅黄橙、10YR 8/3	
172	鉢	外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	橙、2.5YR 6/8	外面丹塗り
173	甕	A、ヨコナデ。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
174	"	" " " " " " "	" " 5YR 7/4	
175	"	" " " " " " "	にぶい黄橙、10YR 7/2	
176	"	" " " D、ヘラケズリ。	にぶい橙、5YR 7/4	外面煤
177	"	" " " " " " "	" " 5YR 6/4	"
178	"	A、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい赤褐、5YR 5/4	
179	"	A、ヨコナデ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
180	"	A、ヨコナデ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	

第3章 調査結果

297	甕	A、ヨコナデ。C、ナデ。D、ナデ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
298	"	" " " C、ハケメ。 " " " "	" " "	
299	"	" " " " " D、ヘラミガキ。	にぶい褐、7.5YR 6/3	
300	"	" " " " " C、ナデ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
301	"	" " " " " " " " "	橙、7.5YR 7/6	
302	"	" " " " " C、ハケメ。	灰褐、7.5YR 4/2	
303	"	" " " " " " " " "	にぶい橙、7.5YR 7/3	
304	"	口縁端部刻目。	橙、5YR 6/6	
305	高杯	" " " " " 円形浮文。	にぶい褐、7.5YR 5/3	
306	"	口縁端部櫛描波状文。	" " "	
307	"	外面ハケメ。3条の凹線。内面ハケメ。	" " "	穿孔2孔残
308	壺	A、4条の凹線。B、ハケメのち板による刺突文。	橙、7.5YR 7/6	
309	"	A、3条の浅い凹線。B、ヨコナデ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
310	"	A、ヨコナデ。B、ヘラ描沈線。	橙、5YR 6/6	
311	"	A、3条の凹線。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面煤
312	"	A、4条の凹線。B、ハケメのちヘラ描沈線。	橙、2.5YR 7/6	
313	"	A、3条の凹線。B、ヘラミガキか。D、ヘラケズリ。	"、2.5YR 6/6	
314	"	A、ヨコナデ。B・C、ヘラミガキ。 " " " "	明赤褐、5YR 5/6	外面煤
315	"	A、外面竹管文。D、ヘラケズリ。	橙、5YR 7/6	
316	"	A、ヨコナデ。B、ハケメ。D、ヘラケズリ。	浅黄橙、7.5YR 8/4	
317	"	A、ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。 " " " "	にぶい橙、7.5YR 6/4	
318	"	A、ヨコナデ。B、ハケメのちヘラ描沈線。 " " " "	" " "	
319	"	A・B、ヨコナデ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
320	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	明赤褐、2.5YR 5/8	内外面丹塗り、雲母・角閃石含む
321	"	" " " " " D、ヘラケズリか。	橙、2.5YR 6/6	
322	"	A、2条の浅い凹線。B・C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
323	"	外面沈線。	明赤褐、2.5YR 5/8	内外面丹塗り、雲母・角閃石含む
324	"	外面沈線。	明赤褐、2.5YR 5/6	"
325	"	C、2条の凹線文。竹管文。ヘラミガキ。	橙、7.5YR 6/6	
326	"	外面3条の凹線。 " " " " " 内面ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
327	"	外面6条の凹線。 " " " " " " " " "	" " "	
328	"	外面にヘラ描き渦状文。	" " "	
329	甕	A、ヨコナデ。C、ハケメ。D、指頭押え。ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 6/3	
330	"	A、3条の凹線。C、ハケメ。D、指頭押え。ハケメ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
331	"	" " " " " D、指頭押え。	橙、2.5YR 6/6	
332	"	" " " " " D、ヘラケズリ。	"、7.5YR 6/6	
333	"	A、2条の浅い凹線。 " " " " " " " " "	にぶい橙、7.5YR 7/4	外面煤
334	"	A、2条の凹線。D、ヘラケズリ。	" "、7.5YR 6/4	
335	"	A、5条の凹線。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	" "、5YR 7/4	
336	"	A、3条の凹線。C、ヘラミガキか。 " " " "	にぶい黄橙、10YR 6/3	
337	"	A、2条の凹線。C、ハケメ。 " " " "	" " "	
338	"	A、3条の凹線。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/3	外面一部煤
339	"	A、2条の凹線。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	明赤褐、5YR 5/8	外面煤
340	"	" " " " " D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
341	"	A、3条の凹線。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	橙、2.5YR 7/6	
342	"	" " " " " C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	"、5YR 6/6	
343	"	" " " " " D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 6/3	口縁部外面煤
344	"	A、外面粗い櫛描沈線のちヨコナデ。内面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	" "、10YR 6/4	
345	"	A、外面5条の凹線。内面ヘラミガキ。C、貝殻刺突文。D、ヘラケズリ。	橙、5YR 6/6	
346	"	A、貝殻沈線。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/2	
347	"	A、外面6条の凹線。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/3	
348	"	A、粗い櫛描沈線。 " " " " "	橙、7.5YR 7/6	外面煤
349	"	A、外面貝殻沈線か。C、貝殻刺突文。D、ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 5/4	外面一部煤
350	"	A、貝殻沈線か。C、貝殻刺突文か。 " " " "	にぶい黄橙、10YR 7/4	"
351	"	A、外面貝殻沈線。C、貝殻沈線。 " " " "	にぶい橙、7.5YR 6/4	"

352	甕	A、櫛描沈線。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 6/2	外面一部煤
353	"	A、貝殻沈線か。D、ヘラケズリ。	明赤褐、2.5YR 5/6	
354	"	A、外面波状文。"	にぶい橙、7.5YR 6/4	
355	"	A、外面ハケメ。C、ヘラミガキ。D、ハケメのちナデ。	"、"	
356	"	A、3条の凹線。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	"、"	
357	"	"。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 6/3	
358	"	A、櫛描沈線。ヨコナデ。C、ハケメ。"	"、10YR 7/3	
359	"	A、外面6条の凹線。内面ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。	"、10YR 6/4	外面煤
360	"	A、外面貝殻沈線のちヘラミガキ。内面ヘラミガキ。C、貝殻沈線のちヘラミガキ。	褐灰、5YR 4/1	外面全体に煤
361	"	A、外面貝殻沈線か。内面ヘラミガキか。D、ヘラケズリ。	灰褐、5YR 4/2	
362	"	"。内面ヘラミガキ。C、貝殻押引文。C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 1/6	口縁部外面煤
363	"	A、外面貝殻沈線のちヘラミガキ。内面ヘラミガキ。C、ヘラミガキ。貝殻波状文。	にぶい橙、7.5YR 6/4	外面一部煤
364	"	A、外面貝殻沈線か。内面ヘラミガキ。C、貝殻刺突文。	"、"	
365	"	"。C、貝殻沈線及び波状文。	"、5YR 6/4	外面煤
366	"	"。C、貝殻沈線か。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	
367	"	A、外面6〜7条の沈線のちナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
368	"	A、貝殻沈線か。C、貝殻刺突文。D、ヘラケズリ。	"、5YR 6/4	
369	"	A、外面5条の凹線。内面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	"、7.5YR 7/4	外面煤
370	"	A、4条の浅い凹線か。C、貝殻押引文。D、ヘラケズリ。	"、7.5YR 6/4	
371	"	A、櫛描沈線。D、ヘラケズリ。	黄橙、7.5YR 7/8	外面剝落
372	"	"。ヨコナデ。"	にぶい褐、7.5YR 6/3	内外面一部煤
373	"	A、ヨコナデ。C、貝殻押引文。D、ヘラケズリ。	橙、2.5YR 6/8	
374	"	A、内外面ヘラミガキ。"	にぶい赤褐、5YR 4/3	
375	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	口縁部外面一部煤
376	"	"。"	"、5YR 7/4	
377	"	A、外面ヘラミガキ。"	"、5YR 6/4	外面煤
378	"	"。"	灰白、7.5YR 8/2	
379	"	A、ヨコナデ。"	にぶい橙、5YR 7/4	
380	"	"。"	明褐灰、7.5YR 7/2	
381	"	"。"	にぶい橙、7.5YR 6/4	
382	"	"。"	橙、5YR 6/6	外面煤
383	"	"。C、指ナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	"
384	"	"。D、ヘラケズリ。	浅黄橙、10YR 8/3	
385	"	A、4条の浅い凹線。C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	明赤褐、2.5YR 5/8	内外面丹塗り
386	"	A、ヨコナデ。C、ハケメ。"	にぶい黄橙、10YR 6/3	体部外面一部煤
387	"	"。"	にぶい橙、7.5YR 7/4	外面煤
388	"	"。D、ヘラケズリ。	"、"	
389	"	A、外面沈線のちヨコナデ。下端部刻目。	"、7.5YR 6/4	外面丹塗り
390	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/4	
391	"	"。"	にぶい褐、7.5YR 5/4	外面煤
392	"	A、ハケメ状のヨコナデ。C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	口縁部外面煤
393	"	A・C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリのちヘラミガキ。	にぶい褐、7.5YR 5/3	
394	"	A、ヨコナデ。C、ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、5YR 7/4	
395	"	A、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 6/2	
396	"	A、内外面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 6/3	外面煤
397	"	A、ヨコナデ。D、ヘラミガキ。ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 4/2	
398	"	"。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/4	
399	"	"。"	にぶい橙、7.5YR 7/4	
400	"	"。C、斜めナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 5/3	
401	"	A、ハケメ状のヨコナデ。C、ハケメのちヘラミ	にぶい橙、7.5YR 6/4	口縁部外面煤

第3章 調査結果

402	甕	ガキか。D、ヘラケズリ。 A、ヨコナデ。C、ヘラミガキ。D、ヘラケズリ のちヘラミガキ。	明赤褐、5YR 5/6	
403	"	"。D、ヘラケズリ。	橙、5YR 6/8	
404	"	"。D、ヘラミガキ。ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	
405	"	"。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	"、"	外面煤
406	"	"。D、ヘラケズリ。	橙、5YR 6/6	
407	"	"。"	にぶい黄橙、10YR 7/4	
408	"	"。D、ハケメ。ヘラケズリ。	にぶい黄褐、10YR 5/3	
409	"	"。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、10YR 6/4	外面一部煤
410	"	A、内面ヘラミガキ。"	にぶい黄橙、10YR 6/3	
411	"	A、ヨコナデ。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、5YR 6/3	
412	"	"。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	
413	"	A、内外面ヘラミガキ。	明赤褐、2.5YR 5/6	内外面丹塗り
414	"	"。C、ヘラミガキ。D、ヘ ラケズリ。	にぶい赤褐、5YR 5/4	"
415	"	"。C、ハケメのちヘラミガ キ。D、ヘラケズリ。	赤、10R 4/6	口縁部及び体部外 面丹塗り
416	"	A、外面ハケメのちヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	外面一部煤
417	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	"、5YR 7/4	
418	"	"。"	にぶい褐、7.5YR 5/3	
419	"	"。"	にぶい橙、5YR 6/3	
420	"	"。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	"、5YR 6/4	
421	"	"。"	にぶい黄橙、10YR 6/3	外面煤
422	"	"。"	にぶい赤褐、5YR 5/4	内外面丹塗り
423	"	A、2～3条の凹線。ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	外面煤
424	"	A、4条の凹線。D、ヘラケズリ。	"、5YR 6/3	
425	"	A、ヨコナデ。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	"、5YR 6/4	口縁部に一部煤
426	"	"。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面一部煤
427	"	"。C、ハケメ。D、ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 6/2	
428	"	A、外面ヘラミガキ。D、ヘラケズリ。	橙、5YR 6/6	外面煤
429	"	A、内外面ヘラミガキ。	暗赤褐、5YR 3/4	内外面丹塗り
430	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	外面煤
431	"	A、内外面ヘラミガキ。"	"、"	内外面一部煤
432	"	A、ヨコナデ。C、櫛描沈線。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 7/4	内外面煤
433	"	"。"	橙、5YR 7/6	外面煤
434	"	"。"	にぶい黄褐、10YR 5/3	"
435	"	"。C、櫛描平行線文。D、ヘラケズ リ。	橙、7.5YR 7/6	"
436	"	"。D、ヘラケズリ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	
437	"	外面櫛描波状文、平行線文。	"、"	
438	"	"。内面ヘラケズリ。	浅黄橙、10YR 8/3	
439	"	口縁端部に9条の櫛描沈線。	褐灰、5YR 4/1	外面煤
440	"	口縁端部に7条の櫛描沈線。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
441	壺	外面にヘラ描格子目文。内面ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 6/3	
442	"	A、内外面ヘラ描格子文。	灰褐、7.5YR 4/2	
443	甕	外面に波状文。内面ヘラケズリ。	橙、5YR 6/6	
444	"	外面板による刺突文。7条の沈線。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
445	"	外面棒状工具による刺突文。内面ヘラケズリ。	"、"	
446	"	外面指頭押圧文。	にぶい赤褐、5YR 5/4	
447	甕	外面貝殻押引文。内面ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
448	"	"。"	にぶい黄褐、10YR 5/4	
449	"	外面に櫛描波状文。	にぶい橙、7.5YR 6/4	
450	"	"、平行線文。	明赤褐、5YR 5/6	
451	"	外面貝殻刺突文。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
452	甕	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	灰黄褐、10YR 4/2	
453	"	外面ハケメのちヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	にぶい褐、7.5YR 6/4	
454	"	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 7/3	
455	"	外面ハケメ。"	"、10YR 6/3	
456	"	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリのちヘラミガキ か。	"、"	外面煤
457	"	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	橙、7.5YR 7/6	外面丹塗り
458	甕鉢	外面ハケメのちヘラミガキ。"	灰黄褐、10YR 4/2	
459	鉢	A、5条の凹線。C、剝落。D、ヘラケズリ。	橙、7.5YR 6/6	外面丹塗り
460	"	A、ヨコナデ。D、ヘラケズリ。	にぶい黄橙、10YR 6/4	外面一部煤

第4章 まとめ

今回の発掘調査の目的は、1985年度の確認調査においてその一部が発見された弥生時代の竪穴住居跡の復元住居を建築するため、その基礎資料を得ることであった。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡3軒、土壇4基、柱穴などが検出され、コンテナ約40箱の土器、土製品、石製品、鉄器が出土した。ここでは、発掘調査の結果得られた成果のうち主要な点についてまとめを行いたい。

遺構について

竪穴住居跡は弥生時代後期初頭の1号住居跡、弥生時代後期初頭～前葉の2号住居跡、弥生時代後期末の3号住居跡を検出した。これらの竪穴住居跡の発掘調査は美甘村内では最初の例である。

1号住居跡は今回の発掘調査の目的となった住居跡で、径920～980cmの大型の円形竪穴住居跡（床面積で約70㎡）である。出土遺物は2号住居跡に切られていることもあり少なかったが、床面から3点の鉄器が出土しており注目される。このような規模をもつ竪穴住居跡は岡山県下でも数少ないものである（註1）。堂の前遺跡では集落全体の調査を実施していないためその性格については不詳であるが、従来様々に議論されている様に、集落の有力者の住居、共同作業場、集会所などが考えられる（註2）。

2号住居跡は径680～700cmの円形竪穴住居跡である。1号住居跡の廃絶後につくられた住居跡で、ほぼ全容を明らかにすることができた。出土遺物の検討からは1号住居跡とさほど時期差は認められない。この住居跡内部には貯蔵穴と考えられる2基の土壇が認められた。この2基の土壇の埋土中には黒ボク層は認められず、住居跡廃絶時には意識的に埋められていたものと考えられる。また、1号土壇は住居跡の壁に沿って設けられていること、そして2号土壇は1号住居跡の柱穴P-10を切っていることから、これらの土壇は2号住居跡に伴うものと考えられる（註3）。また、この住居跡には、中央穴とともにその東側の床面に焼土面が1か所確認できた（註4）。出土遺物の中では鉄器や玉類の出土が注目される。

1号、2号住居跡の壁体溝中には多くの小穴を検出した。これらの小穴については、竪穴住居の壁の崩壊を防ぐための支柱穴とも考えられるが、規則的ではないこと、および全周しないことから断定し難い（註5）。

3号住居跡は、調査区内にその約1/2が残存していたもので全容は不詳である。1号、2号住居跡と異なり方形の平面形になっている。住居跡内からは管玉2個が出土している。

検出された4基の土壇のうち、1号、2号土壇は先述したように2号住居跡内に設けられた

貯蔵穴と考えられる。4号土壇も袋状土壇で貯蔵穴と考えられ、3号住居跡とほぼ同時期のものである。この時期（弥生時代後期末）になると住居跡外に貯蔵穴を設ける様に変化したのかも知れない。

遺物について

各遺構の時期についてはこれまでに概略を述べてきたが、ここでは出土した土器について考えてみたい（註6）。

1号住居跡出土の土器は量的に多くない。図示した土器は特定の時期的なまとまりをもってはいないが、形態（壺、甕、高杯の口縁部など）や手法（甕の内面ヘラケズリ）など、弥生時代後期初頭の様相を示している。ただし、28、29については小片であり、時期差が認められるため上層からの混入品と考えたい。これらの土器は、ほぼ高橋氏のⅦ-a～b期、藤田氏のⅠ期のうちの古相に相当すると考えられる。

2号住居跡出土の土器については、下層と上層とで時期差を認めることができる。下層出土土器については58、63、84、232などが1号住居跡より新しい様相を示している。特に58は完形に近い土器で、これらの土器の時期を2号住居跡の時期と考えたい。これらは、高橋氏のⅦ-b～c期、藤田氏のⅠ期のうちの新相に相当すると考えられる。なお、48、68～74、82についてはいずれも小片であり、時期的にも新しい様相を示しているため上層からの混入品と考えたい。2号住居跡上層出土土器については古いものもあるが、上東式の影響を受けた長頸壺やいわゆる複合口縁をもつ岡山県北山間部に特徴的な甕が多く認められることなど、下層より明らかに新しい様相を示している。これらについては、91、120、161など岡山県南部の土器との比較から、ほぼ高橋氏のⅦ-d期～Ⅷ-a期、藤田氏のⅡ期に相当すると考えられる。なお、図示した遺物の中には時期的に新しいものと考えざるを得ない121、159、162などがあり、共存する可能性もあるがここでは混入品と考えておきたい。

3号住居跡出土土器は少量であるが、176～179と173～175、177、180とでは時期差が認められる。前者は高橋氏のⅧ-c～d期、後者はⅨ期、藤田氏のⅣ期と考えられる。新旧が混在する時期とも考えられるが、ここでは後者の時期が住居跡の時期としたい。

4号土壇出土土器は少量ではあるが、ほぼまとまった様相を示している。高橋氏のⅨ-a期、藤田氏のⅣ期に相当し、弥生時代後期末と考えられる。なお、201については、岡山県南部からの搬入品と考えられる（註7）。

遺構に伴わない土器については、先述の各遺構に本来伴っていたと考えられるものが多いが、425～431などの弥生時代後期後葉の土器（高橋氏のⅧ-c、d期、藤田氏のⅢ期）や439、440、504などの古墳時代初頭の土器も出土している。今回の調査は少面積で集落の一部を発掘したのみであるから、周辺に当該期の遺構が残存している可能性が高いと考えられる。なお、

439、440については岡山県南部からの搬入品と考えるとよいであろう（註8）。

土器以外の出土遺物のなかでは、玉造りに関連すると考えられる石製品の出土が注目される。これらの石材には碧玉と蛇紋岩とがある。碧玉の出土はわずかではあるが、小片については現場での調査において見落している可能性がある。図示したもののうち、568は形態、剝離の状況から管玉の素材になるものと考えられる。これらの碧玉片（568～571）は遺構に伴って出土したものではないが、時期はほぼ弥生時代後期後葉から末と考えられる。工房跡の存在は今回の調査からは不明であるが、少なくともこの遺跡（集落）において碧玉の玉造りが行なわれていたことは明らかであろう（註9）。なお碧玉の玉製品は、2号住居跡上層から管玉（527）が、また3号住居跡床面から管玉（528）が出土している。このうち528は色調、質感とも568～571と類似しているが、527は異なっている。

蛇紋岩については勾玉の未製品が3点出土している（531、532、534）。形態には規格性はない。534は2号住居跡上層から、532は弥生時代後期後葉から末の包含層から出土している。531は表採である。これらの未製品の他に出土遺構、時期とも不詳であるが、数cmから10数cmの蛇紋岩の石核や剝片が出土している（図版7）。これらの中には叩き痕をもつものも認められた。これらのことから、当遺跡（集落）において蛇紋岩を材料とした勾玉の玉造りが行われていたと考えたい（註10）。なお蛇紋岩の玉製品としては、管玉525が2号住居跡下層から、管玉526が2号住居跡柱穴から、また表採ではあるが勾玉530が出土している。

547は特異な石製品である。光沢をもつほどに研磨された面と、赤色の朱あるいはベンガラ（理化学的分析を実施していないので不明）の付着が特徴である（第3章参照）。断定はできないが、朱あるいはベンガラを粉末にする工程で用いられた「すり石」ではなかろうか（註11）。包含層中から出土したもので、時期は弥生時代後期後葉から末と考えられる。

548～550も側面がすべて非常に研磨された石製品である。用途は不明であるが、玉造りも含めて何らかのすり石として用いられたものと考えられる。

以上のように、今回の調査は美甘村内では最初の原始集落の発掘調査であり、数多くの貴重な成果を得ることができた。

なお、復元住居建築については、1号住居跡をモデルとして美甘村教育委員会が実施し、1988年3月に完成している（註12）。

註

（註1）岡山県下において床面積が60㎡をこえる弥生時代の大型竪穴住居跡の調査例としては次のものがある。

(イ)「雄町遺跡第1調査区1号住居跡」(約79㎡、後期中葉)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会 1972年

(ロ)「奥坂遺跡No.4、No.23、No.37住居址」(約74㎡、74㎡、66㎡、後期後葉)『岡山県埋蔵文化財発掘

- 調査報告53』 岡山県教育委員会 1983年
- (イ)「小中遺跡Ⅰ区No.3、4区No.27住居址」(約70㎡、85㎡、後期)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 岡山県教育委員会 1975年
- (ロ)「天神原遺跡23号住居跡」(約95㎡、後期前葉)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 岡山県教育委員会 1975年
- (註2) (イ)近藤義郎「第Ⅳ章単位集団と集合体」『前方後円墳の時代』 1983年
- (ロ)都出比呂志「農耕社会の形成」『講座日本歴史1』 1984年
- (ハ)神原英朗「岡山県山陽町の弥生集落の構成」『考古学研究』23巻4号 1977年
- (註3) このように住居内部に貯蔵穴を設けた弥生時代の堅穴住居跡は岡山県内では東北部に多くみつかっている。
- (イ)「大田十二社遺跡9号住居跡」(後期初頭)『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』 津山市教育委員会 1981年
- (ロ)「天神原遺跡5号住居址」(後期後葉)(前掲註1の(ニ))
- (ハ)「二宮大成遺跡Ⅰ区1号住居址」(後期後葉)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』 岡山県教育委員会 1973年
- (ニ)「二宮遺跡No.83住居址」(後期前葉)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』 1978年
- (ホ)「荒神遺跡12号住居跡」(後期後葉)『榎山遺跡群Ⅰ』 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979年
- この他、岡山県南部にも百間川原尾島遺跡において類例が調査されている(柳瀬昭彦氏教示)。
- (註4) このように中央穴とともに床面に加熱赤変部分をもつことについて都出比呂志氏は、山陰地方の弥生終末期から古墳初頭の住居跡にみられる特徴とされているが(都出比呂志「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』 大阪大学文学部 1985年)、岡山県下では弥生時代において南部、北部ともに多くの調査例がある。例えば、
- (イ)「雄町遺跡第3調査区8号住居址」(後期初頭)(前掲註1の(イ))
- (ロ)「百間川原尾島遺跡堅穴住居33」(後期中葉)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』 岡山県教育委員会 1984年
- (ハ)「西吉田遺跡住居址4、5」(中期後葉)『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』 1985年
- (ニ)「大田十二社遺跡1号、5号、14号(石囲い状の炉)、18号住居址」(後期中～後葉)(前掲註3一(イ))
- (註5) 同様な小穴が検出された「大田十二社遺跡3号住居址」については、堅穴住居壁面の崩壊防護用板材の支柱杭痕と考えられている。(前掲註3一(イ))
- (註6) 岡山県西北部における土器編年については未だ資料が少なく確立されているとは言えない。ここでは以下の文献を参考にした。
- (イ)高橋護「弥生土器—山陽—」『考古学ジャーナル』173、175、179、181 1980年
- (ロ)高橋護「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告7』 1986年
- (ハ)藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64巻4号 1979年
- (註7) これらの遺構出土土器と山陰地方の土器との併行関係については、1号および2号住居跡下層出土土器が花谷氏の「後期前葉」、土井氏の「阿弥大寺Ⅰ期」に、2号住居跡上層出土土器が花谷氏の「九重3号墓式」、土井氏の「阿弥大寺Ⅱ期」～「阿弥大寺Ⅲ期」に、また3号住居跡および4号土壇出土土器が花谷氏の「鍵尾A区5号墓式」、土井氏の「東高江2号貯蔵穴」や「榎塚第2号貯蔵穴」の段階に相当すると考えたい。
- (イ)花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究—鳥根県内の資料を中心に—」『鳥根考古学会誌』第4集 1987年
- (ロ)土井珠美「鳥根県下の状況」『第18回埋蔵文化財研究会 弥生後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について発表記録』第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986年
- (註8) このような岡山県南部からの搬入品と考えられる口縁部に櫛描沈線文をもつ甕の岡山県北部および山陰地方における出土遺跡としては次の遺跡が知られている。
- (イ)「芦ヶ谷遺跡」(『榎山遺跡群Ⅰ』前掲註3一(ロ))

- (四)「谷尻遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』 岡山県教育委員会 1976年)
- (五)「大巨遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告57』 岡山県教育委員会 1984年)
- (六)「五反遺跡」(船津昭雄「美作久世町宮脇住居址をめぐって」『古代吉備』第1集 1958年)
- (七)「宮芝遺跡」(『久世町史』 久世町教育委員会 1975年)
- (八)「小阪部・永富遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告54』 岡山県教育委員会 1983年)
- (九)「忠田山遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23』 岡山県教育委員会 1978年)
- (十)「タテチョウ遺跡」(『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 鳥根県教育委員会、鳥根県土木部河川課 1987年)

この他鳥取県下においても2遺跡ほど出土している。

- (註9) 岡山県下においてはトレンチによる確認調査ではあるが、最近真庭郡川上村に所在する「和田散布地」において弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡内から碧玉片が発見され、玉造り工房跡の存在が予想されている。(「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告18』1988年)

- (註10) 岡山県下において蛇紋岩は真庭郡勝山町、上房郡北房町、阿哲郡大佐山、新見市足立、阿哲郡神郷町などに分布しているという。また、勝山町に近い美甘村田口、延風にも分布している。これらのうち、美甘村田口、延風や真庭郡勝山町、阿哲郡大佐山は堂の前遺跡からは南へ約5～10kmを測るにすぎない(イ)。

弥生時代の蛇紋岩製勾玉の製作遺跡としては、徳島県稲持遺跡が発掘調査され、実態が明らかにされつつある。稲持遺跡から出土した勾玉未製品の中には堂の前遺跡出土のものに類似するものが認められる。また、稲持遺跡出土の砥石や叩石、土製はずみ車も堂の前遺跡出土の石製品や土製品の性格を考える上で参考になる(ロ)。なお、蛇紋岩製の勾玉は岡山県下では百間川原尾島遺跡竪穴住居址29から2個出土しているが、堂の前遺跡のものとは形態が異っている(イ)。

(イ)『岡山県大百科事典』 山陽新聞社1980年

『村誌美甘(上巻)』 美甘村役場 1974年

(ロ)『埋蔵文化財資料展 掘ったでよ阿波』 徳島県教育委員会 1988年。菅原康夫「吉野川上流の勾玉製作—徳島県稲持遺跡の攻玉形態について—」『考古学と技術—同志社大学考古学シリーズⅣ』 1988年

(イ)前掲註4—(ロ)

- (註11) 辰砂粉砕用の石杵については徳島県の若杉山遺跡や黒谷川郡頭遺跡などから出土している(イ)。

また、このような赤色顔料の付着した石製品は岡山県下においても「百間川原尾島遺跡竪穴住居址16」(弥生時代後期末)(ロ)や、「足守川加茂遺跡」(古墳時代前半)(イ)から出土している。

(イ)『特別展 朱の考古学—辰砂と若杉山遺跡—』 徳島県博物館 1988年

『若杉山遺跡発掘調査概報—昭和61年度—』 徳島県教育委員会、徳島県博物館 1987年

『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』 徳島県教育委員会 1987年

(ロ)竪穴住居址16の28番の石製品で報告書には記載がないが、研磨面に赤色顔料が付着している。実見。(註4—(ロ))

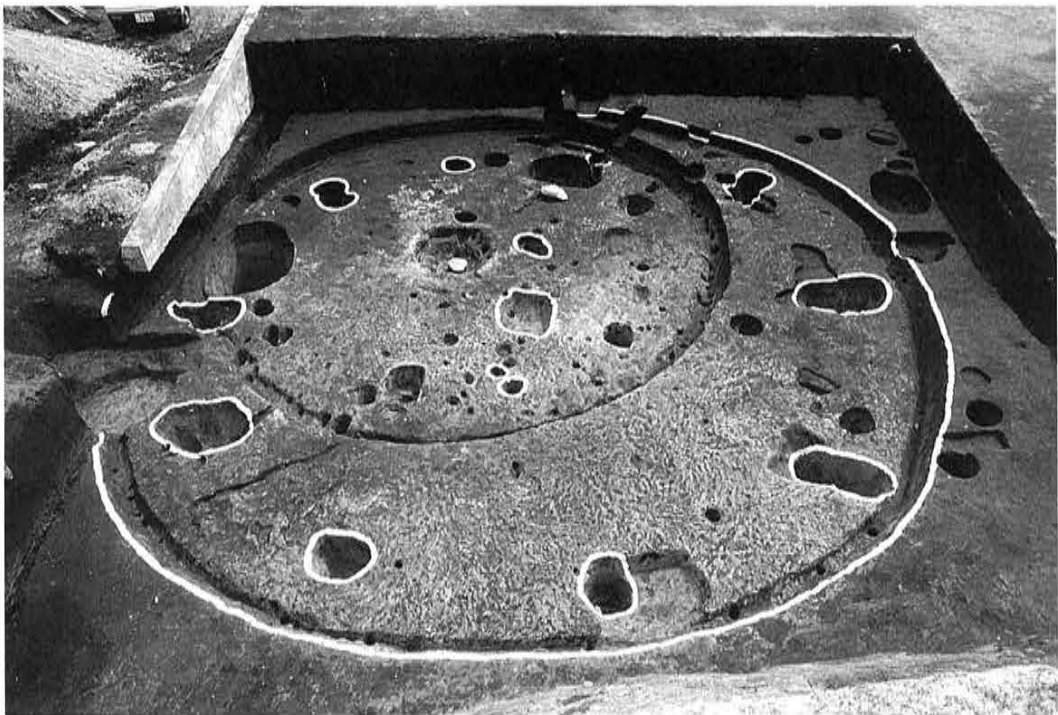
(イ)発掘調査者である江見正己氏、島崎東氏の厚意により実見。

- (註12) 復元住居については、総社市教育委員会の村上幸雄氏に1号住居跡をモデルとした設計図を作成していただき、これに基づいて建築を行った。ご多忙中にもかかわらず引き受けてくださった氏に対し深く御礼申し上げます。

出土遺物の検討にあたっては、岡山県立博物館の高橋護氏、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの高橋進一氏から貴重な御教示を得た。記して厚く感謝いたします。

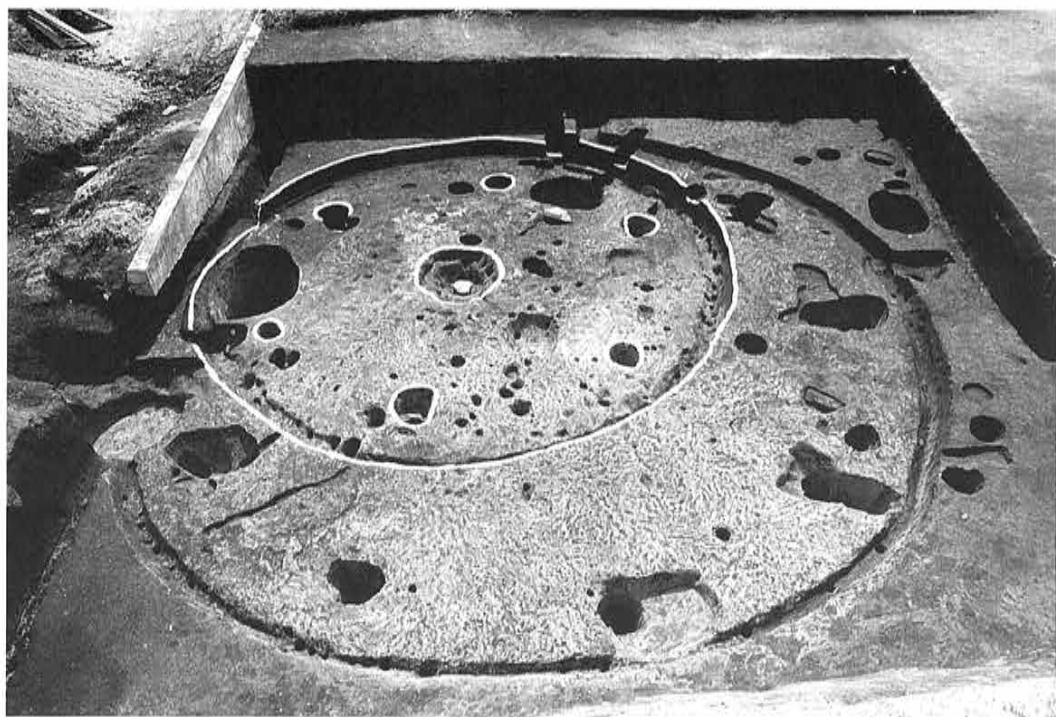


1. 堂の前遺跡遠景（矢印が調査地）（南東から）



2. 1号住居跡全景（北から）

図版 2



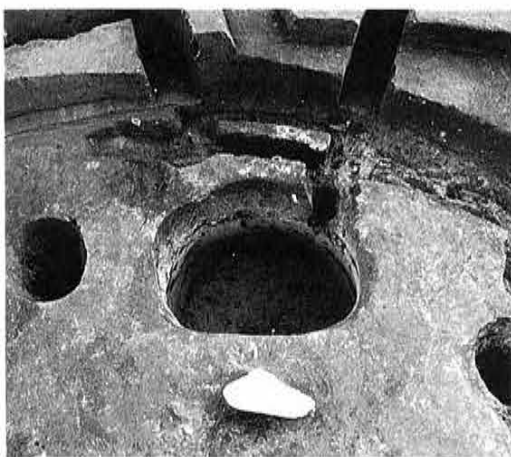
1. 2号住居跡全景（北から）



2. 3号住居跡全景（東から）



1. 1号土坑 (東から)



2. 2号土坑 (北から)



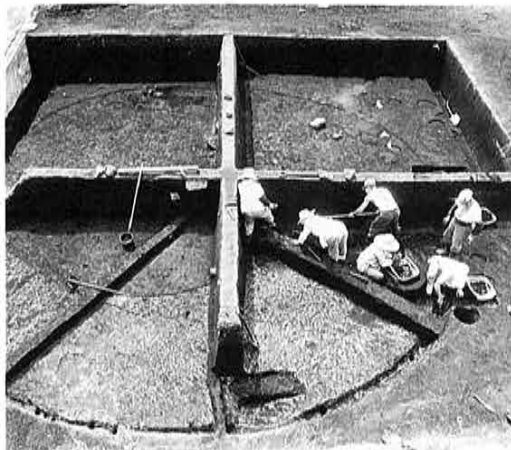
3. 3号土坑 (西から)



4. 1, 2号住居跡の柱穴内礎石 (南西から)



5. 調査前の状況 (北東から)



6. 調査風景 (北から)

图版 4



91



58



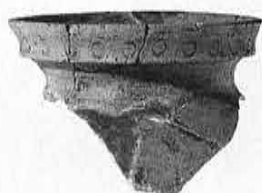
20



92



18



315



498



477



56



170



9



281

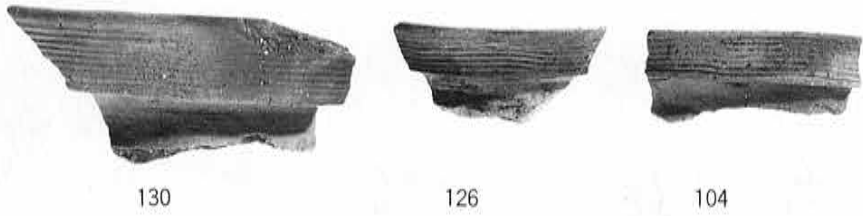
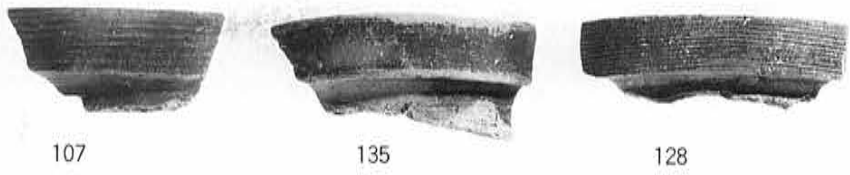


285

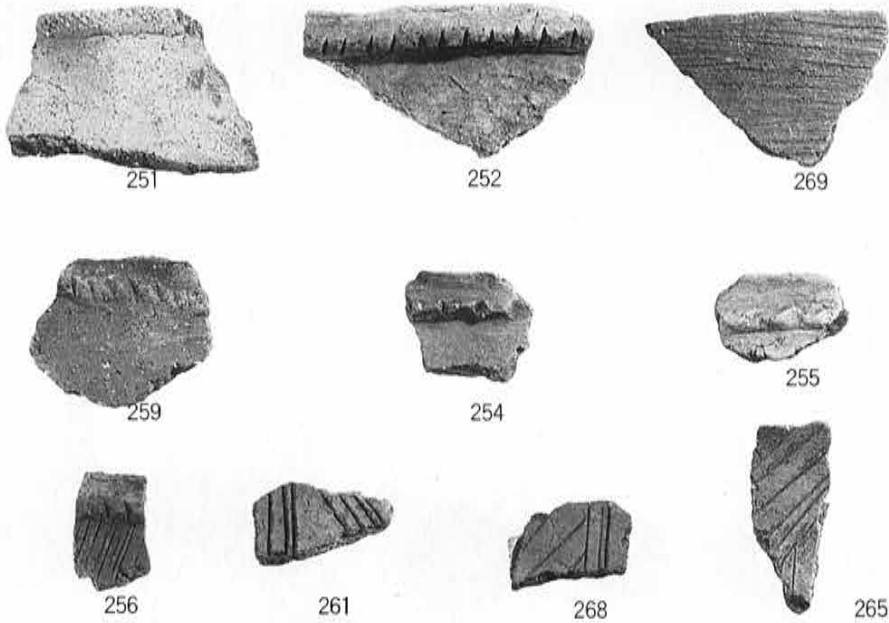


175

出土土器



1. 2号住居跡上層出土土器



2. 出土土器（縄文時代後期，晩期）

図版 6



536



537



538



539



540



541



543



545



560



561



549



547



547



547



548



550



510



511



516



514



524



512



513



523

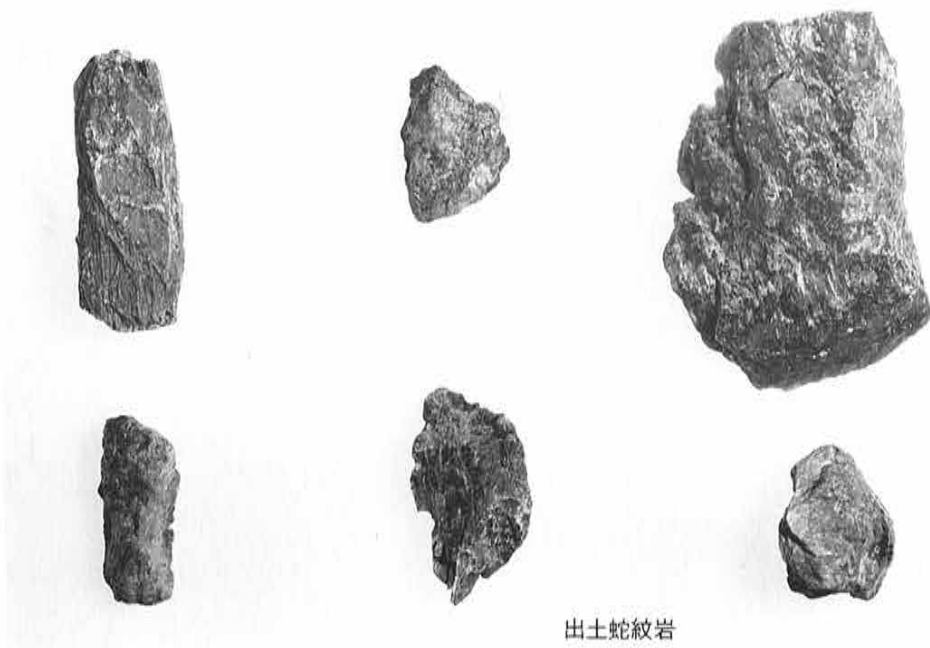
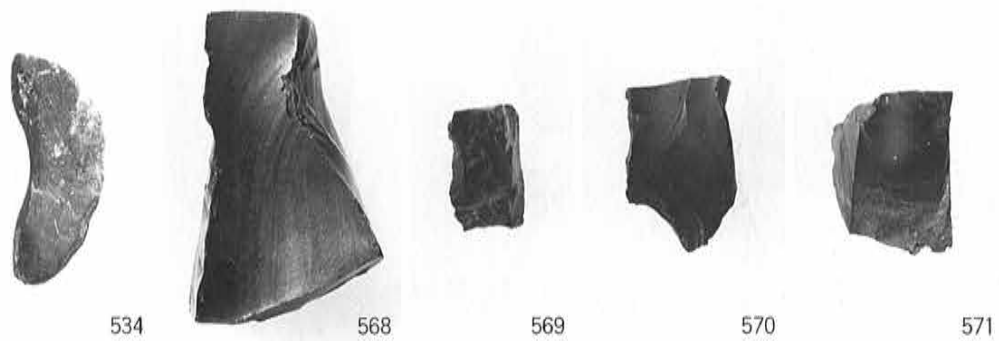


572



573

出土石製品と土製品



出土石製品（玉）と玉造り関連遺物

